



子工の青春 短編集

序文

2000年頃、勢いで『チエの青春』という、名作漫画『ジャリン子チエ』のオマージュ小説（のようなもの）を書いて、その勢いで書いた短編を集めたものです。

設定は『チエの青春』と同じで、高校生のチエを巡るエピソードです。

今は気恥ずかしくて読み返す気にもなれませんが、懐かしさだけはあります。

第一話 特別課外授業？の巻

ひょうたん池。

ベンチに座るチエとヒラメの遠景。

学校帰りの、高校二年生のチエとヒラメ。

チエ「...それで、なに、相談て？」

ヒラメ「ウチ...やっぱりやめるわ」

チエ「？」（ずっこける）

ヒラメ（独り言のように）「どおせウチの勘違いやし」

チエ「どうゆうこと？ ゆわんとなんもわからへんやん」

ヒラメ「...笑わんといてや」

チエ「絶対笑わへん！」

.....

チエ「へえ...そうやったんか」

ヒラメ「絶対誰にもゆわんといてや」

チエ「そら、ゆわへんけど...でも、その人、美術部の後輩なんやろ？」

ヒラメ「わざわざ二人で会ってくれなんておかしいやろ」

チエ「それ、ひょっとしたら...」

ヒラメ（真っ赤になって）「ええねん。ウチの勘違いやから」

チエ「絶対そうやわ。間違いない。（ヒラメの肩を叩きながら）この一！ ヒラメちゃん、やるな！」

ヒラメ「ウチ、不安やから、チエちゃんにも一緒にいてほしいねん」

チエ「一緒に、て...。その人ヒラメちゃんに会いたいんやろ？」

ヒラメ「せやから、分からんように」

チエ「？」

* * *

西萩高校の校門。

ヒラメ「ウチ、なんかすごいドキドキするわ」

チエ「大丈夫やて。ヒラメちゃん、しっかり！ ...じゃあ、ウチ向こうから見てるから」

チエ、少し離れた物陰に身を隠す。

ヒラメと待ち合わせをした男子生徒がやって来る。

少し言葉を交わした後、二人で歩き始める。明らかに緊張しているヒラメ。

後をつけていくチエ。

二人はひょうたん池に向かう。

ベンチに座る二人。後ろの木に隠れて二人の話を聞くチエ。

後輩の男子生徒「先輩、すいません。こんなところまで呼び出して」

ヒラメ「...それで、話てなに？」

後輩の男子部員「オレ...実はずっと前から...その...」

息を潜めて次の言葉を待つヒラメ。

後輩の男「平山先輩の...」

ヒラメ「なんやのん。はっきりゆわなわからへんやん」

男「先輩の友達の竹本さんのことが好きなんです！」

ずっこけるヒラメとチエ。

木の上の二匹の猫。

ジュニア（笑顔で）「またや...」

小鉄（目に線が入っている）「こんなことやとは思たけどな...」

ヒラメ（起きあがりながら）「それやったら直接チエちゃんにゆうたらええやんか！」

男「でも、あの人にいきなり近づくのは危険すぎるていろんな人から言われるもんで...」

チエ（木の後ろで）「なにが危険やねん」

ヒラメ「あんた、そんなことゆうてたらほんまにチエちゃんにどつかれるで」

男「？」

ヒラメ「チエちゃーん、ちょっと来たって」

チエ「呼ばんでもええのに...」

木の陰から現れるチエ。

呆然とする男。

男（驚愕から気を取りなおして）「...オレ、この高校に入る前から竹本先輩のファンなんです。

今日、店にお邪魔してもいいですか」

チエ「...そら、お客さんとして来てくれるなら歓迎するけど」

男「じゃあ、友達もみんな誘って食べに行かせていただきます！」

ヒラメ「酒は呑んだらあかんで」

チエ「どうでもええけど、そんな緊張せんでもええのに...」

去っていく男。

ヒラメ「チエちゃん、ごめんな」

チエ「別にヒラメちゃんが謝ることちがうやん。あの子ら来てくれたらウチ、店もうかるし」

ヒラメ「やっぱりこんなことやと思たんや...」

肩を落として落ち込むヒラメ。

チエ「ヒラメちゃん...」

ヒラメ「どうせウチはチエちゃんの引き立て役なんや。ウチに近づいてくるのはみんなチエちゃん目当ての子ばかりやもん」

(チエ「あかん...これはまずい」)

チエ「ヒラメちゃん、久しぶりにお好み焼き食べに行かへん？」

ヒラメ「.....」

チエ「今日はウチおごるで」

ヒラメ「別におごっていらんもん」

チエ「.....」

ヒラメ「ウチ、家帰って寝るわ。こういうときは寝るのが一番ええねん。チエちゃん、ウチ、別に怒ってないから、悪う思わんといてや」

チエ「分かってる...ウチは、お好み焼き屋行くわ。あそこのオッチャんに頼みたいことあるから」

* * *

ホルモン屋「チエちゃん」へ向かう高校一年生7, 8人。

「おまえ、根性あるなあ」

「そうかな」

「あの店は西萩のブラックホールて呼ばれてるんやど」

「そんなに怖い店なんか」

「オレも噂に聞いただけやけど、ヤクザがびびって近づかへんくらいやから、どんなとこかだいたい分かるやろ」

「それはオレも聞いたことあるわ」

「ほんまに行ってもええんやろな」

「本人からゆわれたんやから、大丈夫やろ」

「なんかあったら、すぐ逃げる用意しとけよ」

「しかし、竹本先輩て、美人で、優しくて、ファンも一杯おるのに、なんでみんなあんなにびびってんのかな...」

「うちの高校の番長も竹本先輩の前では直立不動で敬語やもんな」

「その理由を今から確かめに行くんや」

* * *

ホルモン屋「チエちゃん」。

高校生たちが店に入ってくる。

「いらっしゃーい！」

笑顔で迎えるチエ。

(「またゾロゾロとようけで来たなあ...まあ、その分もうかるからええわ」)

「どうぞどうぞ、奥に入ってゆっくり吞んで...いや、食べてってや」

おそるおそる席に着く高校生達。

奥からヨシ江が顔を出す。

「！」

学生たち、思わずびくっとする。

「いらっしゃい」

「...お邪魔してます」

(チエに小声で)「チエの友達ですか」

「まあそんなとこかな」

ヨシ江(笑顔で)「ご注文は？」

学生「じゃあ、ホルモン10人前と...」

チエ「ホルモン20人前とジュース30本ね！」

* * *

30分経過。

「おい、中々ええ雰囲気やんけ」

「そうやな...あの女の人、竹本先輩のお母はんかな」

「そうやろ、よう似てるもん」

常連客が入ってくる。

「なんや、今日はえらいことなってるなー」

「チエちゃんのガッコ仲間か」

チエ(店中に響く声で)「可愛い後輩たちやから、いじめんといてやー」

学生「なんかオレも、酒呑みたなってきたなあ」

学生「カラオケはないんか」

学生「アホ、こんな店にあるわけないやんけ。見たらわかるやろ」

学生(カウンターの客に小声で)「スンマセン、ちょっと一杯いただけませんか、お金は出しますんで」

常連客「チエちゃん！ あと一杯くれ！」

盛り上がってくる店内。

お好み焼き「かたぎ屋」。

店内でカブに興じる百合根とテツ。

百合根「も、もういっちょ」

札をめくる。しまったという表情。

テツ「アホやー、インケツやー！」

「怖いー！ バカヅキー！ ワシ、あの頃の天才的なカンが戻ってきたみたい」
百合根「今日は調子悪いなあ」
テツ「...おっさん、ほんまに負けた分は全部払えよ」
百合根「わかっとなるがな」
（「チエちゃん、ホンマに責任取ってくれるんやろな...」）
テツ「いきなりカブやろうやなんて、おっさん中々物分りようになってきたやんけ。昔の血が蘇ったんか」
百合根「そんなことどうでもええわい。とにかく今日は夜中までおまえとカブやるんじゃ」
一升瓶を開ける百合根。
テツ「お、おっさん、カブはええけど、酒はやめとけ」
百合根「アホー、おまえの相手なんかシラフでできるかい」
テツ「一升超える前に、ワシ止めるからな」

* * *

ホルモン屋「チエちゃん」。

「こんばんはー」

ヒラメが顔を出す。

「ヒラメちゃんのおかげで、今日は大盛況や」

「複雑な気分やけど、なんしかよかったわ」

「まあ、あんまり深く考えずに...ヒラメちゃんも食べていって。おごるよ」

「オッチャんは？」

「ちょっと事情があって出かけてるねん。...まあ、適当に座ってどんどん食べて」

「こんばんわー」

菊が顔を出す。

「！」

びっくりする学生たち。

（ひそひそと）「おい、あのバアさんなんや」「ブラックホールみたいな顔しとると」「ヤクザがびびるゆうの、おのバアさんとちゃうか」「あかん、こら、呑まなやっとなんわ」

「えらい繁盛ですな。手伝いに来ましたで」

「オバアはん、おおきに」

（小声で）「テツはどうしてますねん」

「お好み焼き屋のオッチャんにゆうて、今日はこっちの店に来させんように頼んであるから」

「そのほうがよろしいな。テツが来たらこの子ら逃げてしまいますわ」

「ケダモンは商売の邪魔になるだけや」
カウンターの後ろでソロバンをはじいている小鉄。

常連客から分けてもらった酒を呑んですっかり盛り上がっている学生たち。

「竹本先輩ー！ 握手してください！」

「一緒に写真撮ってください！」 寄ってくる学生。

「なんやなんや」

戸惑いながらもサービスするチエ。

「平山先輩も、絵の天才やて僕らの間で有名なんですよ」

「またー」 まんざらでもない顔のヒラメ。

ヨシ江「チエ、あの人ら、お酒呑んでるんやないですか」

チエ「ウチ、ジュースしか出してないで」

オバアはん「まあ、店出るまでにシラフに戻ったらよろしいやろ」

チエ（大声で）「西萩高校のみなさーん！ 今日はウチの店にホルモン食べに来てくれて、どうもおおきに！」

学生たち（拍手喝采しながら）「竹本センパーイ！」

チエ「今度は、ウチと一緒に好み焼き食べに行こ！」

学生たち「ワーイ！」

そのころ「かたぎ屋」では...

テツ「ワーイ！ バカヅキー！ 怖いー！ ボク怖いー！」

（ジュニア「オヤジ、ゆうてくれたらいつでもどつき回して追い出したるど」）

テツ「おっさん、もうひと勝負いくどー！」

百合根「ちょっと休憩や」

後ろを向いて酒を食らう。

テツ「アホー、ツキまくってるときに休んでなんかおれるかい」

百合根（振返って）「勝手なことゆうな、ドアホ！」

テツ「...あかん、目がすわっとる」

店から逃げ出すテツ。

（走りながら）「今日は絶対ついてる！ ワシ、今バクちやったら誰にも負けへん自信あるど」

* * *

学生「先輩、じゃあ僕らそろそろ...」

チエ「そう？ もっとゆっくりしてくれてもええんよ」

学生「ごっつええ店ですね」

学生「また来ますわ」

チエ「おおきに。また来たってやー」

（「もおかった...今日はツいてる！」）

チエ「じゃあ本日のお勘定の方を...」

学生（店の外で）「おい、あのおっさんなんや」

学生「叫びながら走ってくるど」

チエ「！？」

「ついとるー！ さっきから走ってるだけで、ヤクザに続けて三人も会うなんてー！ 十年に一度のバカツキやー！」

向こうの方から走ってくるテツ。

チエ「テツや！ ...お好み焼き屋のオツちゃん、どないしたんやろ」

「チエー！」

店に駈け込み、大勢の高校生を見て呆然とするテツ。

テツ「こいつら、お前が連れてきたんか」

チエ「お客さんや。いらんことせんといてや」

しばし沈黙の後、テツの顔に不気味な微笑が浮かぶ。

テツ（学生たちに向かって）「君達、今日はメチャメチャついとる！」

チエ「なんのこっちゃ」

テツ（花札を出して）「...社会の特別課外授業に参加できるなんて」

全員ひっくり返る。

* * *

店内は一気に学生たちとテツのカブ大会会場へと変貌。

真剣にカブに興じる学生たち。

テツ「気合入れてやれよー！ おまえら負けたら明日から晩飯は毎日ホルモンやどー！」

学生「その代わりオレらが勝ったら今日の勘定はタダやからなー」

チエ「...オバアはん、ほっといてええの？」

菊「あの子らの酔いが覚めるまで遊ばしといたらよろしいわ」

ジュニア「チエちゃんこの高校で、大丈夫なんか」

小鉄「...学校教育のことをワシに聞くな」

第二話 孤独な男達...の巻

朝。竹本家の部屋。

フトンを並べて眠るテツとチエ。チエの足元には小鉄が寝ている。

目を覚ますチエ。台所ではヨシ江が朝の準備の最中。

「お母はん、いま何時？」

「もうすぐ七時半ですわ」

「え！ あかん、はよ準備せな遅刻や！」

フトンから飛び起きるチエ。小鉄も同時に起きる。

フトンたたんで、押入れにしまい、着替えを始めるチエ。

慌てて部屋から飛び出し、戸を閉める小鉄。

障子扉の向こうでワサワサと朝の準備の音がする。

「チエちゃんが大人になってきて、ワシも色々気ィ使うなあ...」

物音を聞きながらつぶやく小鉄。

「テツー！ そんなところでいつまでも寝てたら邪魔や！」

頭を蹴飛ばす「ゴン」という音。

「あー！！」

テツの叫び声。

「むこう向いといて！」

チエの声。

小鉄「またか...見てはいけないものを見てしまいよったんやな」

「しかし、いいかげんこの家も限界あるよなあ...年頃の娘とケダモンのような男と一緒に住むのは」

「ワシもそろそろ飼猫稼業も潮時かなあ...お邪魔虫になってまでここで暮らすつもりもないし...」

「いってきまーす！」

走って店を飛び出すチエ。

そのすぐ後に家を出るヨシ江。

あとは沈黙。

部屋に戻る小鉄。

フトンを被って寝ているテツをしげしげと眺める。

「もうええかげんこの男見るのもいやになってきたしなあ...」

目を覚ますテツ。

そーっとフトンから顔を出し、誰もいないことを確認。

「ああ、なんでこんな毎朝気イ使わなあかんねん...このままやとワシ、ケンカ弱なっていく一方やんけ」

「しかし、いいかげんこの家も限界あるよなあ...」

(小鉄「ワシとおんなじことゆうな！」)

「ワシもそろそろこの家に住むのも潮時かなあ...」

(小鉄「アホなことゆうな。おまえにこの家を出る根性があるのか」)

しげしげと小鉄を眺めるテツ。

「もうこいつ見るのもいやになってきたしなあ...」

(小鉄「失礼なことゆうな！ 全部こっちのセリフじゃ」)

「あかん。この部屋の中におったら気分沈んでくる...とりあえずどっか行こ」
家を出ていくテツ。

小鉄、家の中に一人残される。

「しかし、生まれてこの方、ずっと天涯孤独の身で来たこのワシが、この家に住みついてからもう@年か...このままいくと、下手したら飼い猫の時期の方が長くなりそうやなあ」

「自分では飼い猫やなんてゆう意識なくても、無意識のうちにそうなってきとるんやろな...ワシももう長くない身や。このままこの家で死ぬのも...」

しみじみと考え込む小鉄。

「小鉄一！」店先に現れるジュニア。

「おう、久しぶりやな」

屋根の上に寝そべる二匹。

ジュニア「...そうか、おまえもそんなこと考えとったんか」

小鉄「おまえも、てなんや」

ジュニア「オレもそろそろ、いつまでもオヤジのそこにおるのもどうかと思てたところや」

小鉄「おまえとこの場合、オヤジが承知せんやろ」

ジュニア「まあ、いきなり出ていくわけにはいかんやろけどな...でも、家にいる時間は徐々に減

らしていったるつもりや」

小鉄「おまえ、こないだも神戸に遠征してたらしいな」

ジュニア「ああ...神戸でしょうもない連中が暴れてるゆうの聞いたから、一週間ほどあいつらノ
ばしに行って来たんや」

小鉄「その分やと、京阪神の制覇は間近みたいやな」

ジュニア「オヤジとはできるだけ一緒にいてやりたいんやけど、関わり合う場所が多くなればな
るほど、オレも忙しなってくるしな...」

ジュニア「ところで、おまえとはどうやねん」

小鉄「.....」

ジュニア「なんか不満でもあるんか」

小鉄「ワシもそろそろもう一度孤独に向き合う必要を感じたのさ」

ジュニア「おまえ、昔のオレよりもキザなことゆうようになってきたな...」

* * *

お好み焼き屋「かたぎや」。

テツ「孤独や...」

百合根「おまえ、さっきからなにゆうとんねん」

テツ「ワシ、孤独なんや」

百合根「勝手なことばかりゆうな。女房も子供もおって何が孤独やねん」

テツ「おっさんには分からんのじゃ」

百合根「おまえにもワシの気持ちが分かるか。...ジュニアも最近はめっきり...まあ、おまえと孤
独自慢してもむなしくなるだけやからやめとくわ」

テツ「...あかん、おっさんと一緒におったらますます気分沈んでくる。ちょっとカルメラの店ひ
やかしに行こ」

百合根「食うだけ食って、ほんま勝手な奴や...」

* * *

「ただいまー」

学校から帰ってきたチエ。

「...誰もおらんの」

奥の部屋に入り、障子を閉める。

「あかん...お好み焼きとラーメンと中華丼立て続けに食ったら気分悪なってきた」
テツが帰ってきて、店の中に入り、障子をガラッと開ける。

「アアーー！！」

叫ぶテツ。

「こらあかん！」

踵を返して家から逃げ出す。

「なんや、お化け出たみたいな声出して...」

部屋の中でつぶやくチエ。

「ボコッ！」

チエが部屋からのぞくと、入り口の所でテツが倒れている。

「チエちゃん、久しぶりやな」

「花井のオッチャン...」

* * *

奥の部屋でお茶を飲む花井とチエ。横で寝ているテツ。

「...オッチャンもいきなりどつかんでもええのに」

「すまんすまん。逃げ出すとこやから捕まえた方がええと思たんや」

「テツ、ああいうときには反射的に逃げ出すねん」

「しかし難儀な男やなあ...」

「お母はんのときもこうやったんやろか」

「そ、そこまでプライベートなことはワシもちょっと...」

「ところで、今日は何か用？」

「いや...久しぶりにチエちゃん達と一緒にメシでもと思ただけや」

「今日、定休日やから別にかまへんけど...珍しいやん」

「...なんか最近、孤独が身にしみるようになってなあ」

「なんでまた？ ...せっかく可愛い孫も息子夫婦もいるのに」

「あいつらのシアワセな様子を見れば見るほどかえってワシの立場ちゅうもんを実感するんや
なあ、これが...まあチエちゃんにこんな話してもしゃあないわな」

「ウチにはよう分からんわ」

「人間、いつかは孤独ちゅうもんに向きあわないかんようできとるんかなあ...ひょっとしたらテツも孤独なんかもしれんで」

「テツが？」

「チエちゃんには分からん思うけど、テツにしてみたら、チエちゃんがだんだん手の届かんところに行ってるような気持ちなんとちゃうかなあ」

「だからウチの着替え見たら逃げるのん？」

思わずお茶を喉に詰まらせて咳き込む花井。

「それとこれとは別の話やるけど...チエちゃんもたまにはテツに甘えたったらどうや」

「じゃあ、ウチ、今日からちょっとテツに優しくしたろかな」

「どうや、ヨシ江はん帰ってきたら、テツも入れて4人でメシ食いに行くゆうのは」

* * *

食事に向かう4人。花井とヨシ江が並んで歩き、そのしばらく後ろをテツとチエが並んで歩く。

花井「最近家の中がギクシャクしとるんか」

ヨシ江「いえ、別にそんなことは...」

花井「チエちゃんがヨシ江はんの若い頃に似てきたから、テツ困っとるんやないか」

ヨシ江「またセンセ、そうゆうこと...」

花井「まあそんな時期もあるわい。家のことではワシもあんまりエラそうに言えんからな」

チエ「テツとこうやって並んで歩くのって久しぶりやな」

テツ「なんやおまえ、今日はどうかしたんか...いきなりメシ食いに行こうとか、一緒に歩こうとか...」

チエ「たまにはええやんか」

テツと腕を組もうとするチエ。

テツ「こらー、何するんじゃ！ 軟派なガキみたいなことしやがって」

チエ「テツ、寂しかったらウチに寂しいてゆいや」

テツ「なにゆうとんねん」

チエ「テツ、ウチのこと嫌いか」

身をすり寄せるチエ。

テツ「気持ち悪いな、おまえは！」

関節がおかしくなって歩き方がぎこちなくなるテツ。

ひょうたん池の木の上から眺める小鉄とジュニア。

ジュニア「...えらい仲睦まじい光景やないか」

小鉄「やっぱり親子水入らずが一番なんやろなあ...」

* * *

次の日の朝。

布団の中で目を覚ますチエ。

「お母はん、いま何時？」

「まだ六時半ですわ。お母はんもさっき起きたとこよ」

隣を見ると、布団は空になっている。

「あれ、テツは？」

「わたしが起きたときにはもういませんでしたけど、どっか行ったんやろか」

「ゆうべ帰ってきたときは、完全にグロッキー状態やったのにな...」

「あんた、お父はんにえらいいつもと違うことゆうから、お父はん困ってましたがな」

「難儀なオトコやなあ...」

「?! チエ、いま何かいいましたか？」

「いや...ちょっと花井のオッチャンのゆうたこと思い出しただけ」

「？」

「そういえばゆうべから小鉄もおらへんな...」

その頃...

花井家。

花井「テツ一、たまにはこうゆうのもええもんやな」

テツ「ちょっともようないわい...なんで朝っぱらからおまえと風呂入らなあかんのじゃ」

花井「おまえがワシの家の近所ウロウロしとるからやないか」

テツ「おまえとこに来たかったからやないわい」

花井「これから毎朝入りに来い」

テツ「おまえと入るのはごめんじゃ」

花井「ええやないか、孤独なオトコどうし、仲良うやろうや」

テツ「おまえなんかと一緒にすな」

花井「それとも家でチエちゃんの着替え見るほうがええか」

テツ「アホー、しょうもないことゆうな! おまえのせいでチエが変なことゆうからワシ、関節ガタガタになってしもたやんけ」

花井「ワシがほぐして直したる。その前にワシの背中流せ！」

二人の会話を聞きながら花井家の屋根に寝そべる小鉄。

「孤独と向き合うとはゆうたものの、毎日ねぐらを変える生活ゆうのも、慣れるまではけっこう寂しいかもしれんなあ...」

第三話 ヒラメちゃんの初恋の巻

西萩高校。

午後の授業。睡魔と戦いながらノートを取るチエ。

少し離れた席にいるヒラメの方をときどき覗き見る。

頬づえをついて、心ここにあらずといった表情のヒラメの横顔。

教師「平山、次読んでくれるか」

ヒラメ「.....」

チエ（小声で）「ヒラメちゃん！」

ヒラメに向けて消しゴムを投げるチエ。

教師「平山！」

机の上に落ちた消しゴムを眺めて、チエの方を見るヒラメ。

「チエちゃん、この消しゴム...」

（「ウチの名前呼ばんでええ！」）

「何ゆうとるか！ ポケッとするな！ ...じゃあ、竹本、代わりに読め」

「は、はい」（「最悪や...」）

* * *

放課後。

「チエちゃん、ごめんな」

「ええねん、気にせんといて。ウチもちゃんと予習してなかったから、自分のせいや。それより、今日、一緒に帰らへん？」

「...悪いんやけど、今から美術部で特別活動があるねん。ウチ、一応みんなの作品まとめることになってるから...」

「ああ、そうなん。じゃあ、また明日にでも」

「実は明日も...」

「そうか、ヒラメちゃん、部長やもんね」

「ごめんな...」

そのとき、廊下を歩いてくる美術教師の玉造。この学校に4月から赴任した、海外生まれの、芸大出の青年で、美術部の顧問をしている。いかにも育ちのよさそうな、芸術家肌の教師で、女生徒からの人気も高かった。

「平山さん！」

にこやかに声をかける玉造。

「あ、センセ！」

ヒラメの目が輝く。

「これから美術室に行くんですか」

「はい」

「準備よろしくお願いしますね」

「はい」

階段を昇っていく玉造。その後姿を見つめるヒラメ。

チエ「そしたら、ウチ、先に帰るわ」

ヒラメ「……」

チエの声は耳に入っていない様子。

ため息をつき、階段を登りだすヒラメ。

チエ「ヒラメちゃん」

ヒラメ「…あ、チエちゃん。悪いけど、先に帰ってくれる？」

チエ「うん。ほな、また明日」

ヒラメ「さいなら」

階段を駆け上がるヒラメ。

チエ「ヒラメちゃん、なんか変な感じやな…」

* * *

「ただいまー」

家に帰ってきたチエ。

部屋にカバンを置いて、私服に着替えて、店の準備を始める。

（店の前を掃除しながら）「小鉄がおらんゆうのも、こうしてみるとけっこう大変やな…」

ここ数日、小鉄は家に戻っていない。

（「チエちゃん、久しぶりー」）

小鉄がチリトリを持って現れる。

「小鉄！ どないしたんや。久しぶりやんか」

（小鉄「ワシ、チエちゃんとの絆を徐々に弱めるために苦労してるんやで…」）

「この家になんか不満でもあるんか」

（小鉄「不満とかそうゆうんやのうて…。男の生き様と死に様の問題とゆうか…」）

「あんた、出ていくのは勝手やけど、男やったら都合悪くなったときだけ戻ってきたらあかんで」

（小鉄「テツと一緒にせんといてくれ！」）

「チリトリちゃんと持っというてや」

(小鉄「久しぶりに会うたのに、なんか冷たい感じやなあ...もうちょっとこう、年老いた者への気遣いとゆうか思いやりが...」

(「『あんた、身体は大丈夫なんか』とか、『あんたがおらんようになって寂しかったんやで』とかゆう一言がどれだけワシを力づけることか...」)

(「所詮人間と猫の間にほんまの愛情を期待するのがアホなんかなあ...」)

ブツブツ考え事をしながらチリトリを構える小鉄。

「ゲホッ！」

チエが箒で掃いたホコリがまともに顔にかかる。

「あんたも年取ったなあ...チリトリもちゃんと持たれへんのんか」

(小鉄「哀しいなあ...」)

* * *

夕方。

「今日は客の入りが悪いなあ...」

ホルモンを焼きながら考えるチエ。

「店はよ閉めて、明日の予習でもやろかな...二日続けて当てられてできへんかったら体裁悪いもんな」

店先にヒラメの姿。

「ヒラメちゃん」

「チエちゃん」

「部活終わったん？」

「うん...」

なんとなく様子に変なことを察知したチエ。

「ヒラメちゃん、ちょっと店の中においでや」

「うん、おおきに」

「なんかあったん？」

「別に...」

「.....」

思いつめた表情で座っているヒラメ。

「...チエちゃん、玉造センセのことどう思う？」

敏感なチエはもうピンと来た。

「ヒラメちゃん、センセのこと...」

しばらく沈黙した後、ゆっくりと口を開くヒラメ。

「センセ、今月で学校辞めはるねんて」

「！」

「外国に絵の勉強しに行くんやて」

「へえ...」

「ウチ、センセには色々教えてもうてお世話になったし...美術部のみんなでお別れ会やろう思うねん」

「...そうなん」

「それで、チエちゃんにお願いがあるんやけど」

「？」

「お別れ会、この店でさせてもうてかまへん？」

「こんなとこでええの？ もっとええ場所ようさんあるのに」

「ウチ、ここでやりたいねん。あんまり騒がしいとこでやるより、この方が落ち着くし」

「ウチはもちろんかまへんけど...あのセンセ、上品そうやから、こんな店イヤがるんちゃうかなあ」

「それは大丈夫、喜ぶ思うわ。...それよりウチ、カラオケのある店に行くのイヤやねん」

「ハハハ...」引きつった顔で笑うチエ。

「歌では何回も失敗してるから」

「確かに歌は...」（額に汗）

「今度の土曜日に来てもかまへん？」

「わかった。じゃあ、その日はヒラメちゃんらの貸し切りにするわ」

「おおきに。ほんまに助かるわ」

「.....」

ヒラメ、しばらく無言になる。

俯いたヒラメの目から、涙が一滴、テーブルの上に零れ落ちる。

「ヒラメちゃん...」

「ごめん、ウチ、帰るわ。ほな、さいなら」

ヒラメ、急いで店を出て行く。

* * *

夜。

店が終わった後、ヨシ江と二人で店の前を掃除するチエ。

「へえ...美術部のセンセのお別れ会ですか」

「...ここだけの話やけど、ヒラメちゃん、そのセンセのこと、好きやねん」

「？」

「好きゆうても、ええ人やとか、そうゆうんとはちがうで」

「.....」

二人とも沈黙。

「...せっかく好きになったのに、可哀相やな」

小さな声でポツリと呟くチエ。

ヨシ江「ええお別れ会にしてあげたいね」

チエ「うん...」

屋根の上の小鉄。

「事情は分かった...ワシも一肌脱ぐよ」

三人の頭上に輝く半月。

* * *

土曜日。

「テツー、分かってるな。今晚は店に近寄ったらあかんで」

「分かったわい、朝から何回もゆうな。父親のこと疫病神みたいに言いやがって」

「なんしかウチの高校の子には絶対に近づかんといてや。こないだの騒ぎでもうコリゴリや」

「心配せんでもおまえの商売にはもう一生関わり持たんわい」

店を出て行くテツ。

「自分のゆうてることの意味ぜんぜん分かってないな...ウチ、誰のために働いてる思てるねん。

...まあええわ、考えたら気分沈んでくる。とりあえず今日のこと考えよ」

(小鉄に向かって)「あんた、今日は活躍してや。終わったらゆっくり休ましたるから」

(小鉄「老体に鞭打って頑張らしてもらいます」)

「さあ、準備や！」

小鉄と二人で店を飾りつけるチエ。

オバアはんがやって来る。

店の飾りつけを見て驚いて一言。

「チエ、今日はえらい盛大なことになってますな」

「今夜はパーティーの貸し切りやねん」

「そらまた珍しい。なんのパーティーですんや」

.....

「そうゆうことやったらわたいも一肌脱ぎまっせ。ヒラメちゃんには色々世話になってますからな」

「じゃあオバアはん、店行って景気よさそうなもん買ってきてくれへん？」

「ガッコのセンセの送別会ですからな...どうゆうのがよろしいかな」

「あんまり趣味の悪いのはやめてや」

「...紅白の垂れ幕とクスダマでも用意しまひよか」

ヒラメが店をのぞきに来る。

「チエちゃん...こんな色々してくれんでもええのに」

「もともと汚い店から、これくらいやらんと」

笑顔で答えるチエ。

「おおきに...ウチ、また後でみんな連れてくるから」

いったん店を去るヒラメ。

「こんにちわー」

お好み焼き屋のオヤジとカルメラ兄弟がやって来る。

カルメラ「チエちゃん、ワシらも準備手伝うわ」

チエ「おおきに。でも、とりあえず大丈夫。夜になったら配達お願いするから」

百合根「ワシもお好み焼き持ってこよか」

チエ「じゃあ、特大のやつ何枚かお願いしよかな」

花井拳骨がテツと一緒に現れる。

「チエちゃん、聞いたど一。今日は送別会か」

チエ「オッチャン、テツなんか連れてこんといてや。せっかく追い出したのに」

テツ「おまえそれが父親に対する...」

花井（テツをどつきながら）「そうゆうときだけその言葉を使うな」

チエ「あ、そうや。オッチャン、テツにお好み焼き持って来させてくれる？」

花井「なんのこっちゃ」

チエ「オッチャン、インテリヤからセンセと話合うかもしれんな。元々学校の先生やし...。テツの監視してくれるんやったらおってくれてもええで」

花井「そらありがたいな。ワシ、最近、賑やかなこと好きや」

（「アルツハイマー」「徘徊老人」「粗大ゴミ」「お邪魔ムシ」...花井の横でブツブツゆうテツ。）

* * *

ヒラメが玉造先生と美術部の生徒たちを連れて店に着いたときには、店の飾りつけは完成していた。

「西萩高校美術部一同様」の看板が表に立っている。

「いらっしゃーい！」

店の中で一同を迎える、チエ、ヨシ江、オバアはん、花井、小鉄、ジュニア。テーブルの上にはお好み焼きとホルモンが用意されている。

「スバラシイ店ですね！」

ニコニコする玉造先生と、半ば驚いた生徒たちの顔。

ヒラメ「チエちゃん、みんな…。こんな色々、おおきに…」

チエ「あとで中華料理も来るから」

ヒラメ「ほんまにありがとう…。あれ？ チエちゃんとそのオツちゃんは？」

チエ「今日はちょっと用事があって…」（額に汗）

「……」

奥の座敷で、猿轡を噛まされ、縛られているテツ。

第三話終わり

（第四話 センセのお別れ会の巻 につづく）

第四話 センセのお別れ会の巻

ホルモン屋「チエちゃん」 で玉造先生のお別れ会が始まる。

司会進行役の美術部長ヒラメ。

「それでは、ただいまより、この4月よりわが西萩高校美術部の顧問を務めてくださった、玉造先生の渡仏壮行会を行いたいと思いまーす！」

（ジュニア「トフツソウコウカイてなんや」）

（小鉄「センセのお別れ会ゆうことやる」）

チエ（ヨシ江に向かって）「ヒラメちゃん、えらい張り切ってるわ」

花井（チエに向かって）「彼、フランスに行くんか」

チエ「絵の勉強に行くんやて」

ヒラメ「...では、玉造先生の前途を祝して、カンパーイ！」

生徒たち「ありがとうございましたー！」

生徒たちに取り囲まれ、感激屋らしく「スバラシイ！」を連発しながら賑やかに飲み食いする玉造。

ヒラメは隅の方で静かに食べている。

ホルモンを焼くチエ。給仕に忙しいヨシ江とオバアはん。カウンターの後ろでチエの手伝いをする小鉄とジュニア。

ジュニア「えらい華やいだ雰囲気やな」

小鉄「客の質が違うと、店の空気がこうも変わるもんかな...」

ジュニア「普段はガラの悪いおっさんばかりやもんな...こんなようさんの女子高生見たの初めてや」

小鉄「君の言い方にはすでにおっさんの匂いが感じられるよ」

ジュニア「あなたの心の卑しさがそう感じさせるんじゃないの...」

玉造は花井の本を読んだことがあるらしく、いつのまにか花井も話の輪に加わっている。芸術談義に熱中する玉造と花井。

玉造「花井先生の『李白小伝』学生時代に読ませていただきました。私、中国の画と詩にとっても興味があるんです。...（以下略）」

花井「フランスの印象派は日本画の影響が...（以下略）」

意気投合する二人。

玉造「...花井先生のようなスバラシイ方とはもっと早くお会いしたかったです！」

花井「君みたいな若者が海外で見聞を広めるのはええことや。向こうのもんをどんどん吸収して

、立派な画家になってくれよ」

玉造「感激です！」

* * *

ヒラメ「では、私達から感謝の意を込めて、花束と記念品の贈呈を行います！」

女生徒の代表が花束と記念品を渡す。

玉造「どうもありがとうございます！」

泣き顔の女生徒たち。

ヒラメ「...続いて、玉造先生のお言葉をいただきたいと思います！」

玉造「みなさん、今日はどうもありがとうございます。この店のみなさんも、スバラシく暖かいもてなしをしていただいて、本当に感謝しています。

私は、このたび思うところがあって、ヨーロッパで絵を学びながら、画家として活動するために、フランスに渡ることになりました。短い間でしたが、西萩高校のこと、そしてこの美術部のスバラシイみなさんのことは、一生忘れることはないと思います...

(号泣する女生徒たち。)

みなさんは一人一人本当にスバラシイ才能を持っています。これからも、その素質を豊かに伸ばして、どんどん表現してってください。いつかまた、お会いするときもあるでしょう。そのときには、みなさんのスバラシイ作品と出会うのを楽しみにしています！

今日は、みなさんに、お渡ししたいものがあります。

(カバンから包みを取り出す。)

これから一人一人名前を呼ぶので、どうか受け取ってください！」

それは、玉造がそれぞれの生徒のために描いた似顔のスケッチだった。

順番に名前を呼び、スケッチを手渡す玉造。

最後にヒラメの名前が呼ばれた。

「平山ヒラメさん！」

「はい！」

元気に立ちあがるヒラメ。

玉造から絵を受け取る。一瞬、ヒラメの顔が泣きそうに歪んだ。

しかし、すぐに笑顔になって、大きな声で、

「センセ、実はウちらも、センセに渡したいものがあるんです！」

筒の中から美術部の生徒たちが共同製作した絵を取り出して、みんなの前に広げるヒラメ。

西萩高校を背景に、美術部全員が集合している様子が描かれている。真ん中には玉造先生がいる

。

「……」

絶句する玉造。

やがて一言。

「…スバラシイ！」

全員の拍手。

店内の感情の高まりは最高潮に達した。

オバア「ええもんですなあ…わたいもなんか感動しますわ」

チエ「ヒラメちゃん、今日はほんまにカッコええわ」

ヨシ江「…みんなええ子やね」

小鉄「美しい光景や…」

ジュニア「オレら、こんなところにおいてええんやろか。なんか場違いのような気ィするわ」

* * *

奥の座敷で、足を縛られながらギョーザを食べているテツ。

花井「おまえが出ていったらぶち壊しやからな、大人しくしとけよ」

テツ「分かってるわい…ワシはいつもこうしてみんなの知らんところで犠牲になっとるんじゃ」

* * *

お別れ会は、ヒラメの元気な挨拶をもって無事に終了した。

「…それでは、二次会はカラオケです！ 参加する人は、副部長の田中さんの案内に従ってください！」

（チエ「？」）

……

生徒たちが店を出て行く。

玉造「平山さん、今日はスバラシかったです。本当にありがとう」

ヒラメに声をかける玉造。

「センセ、フランスに行っても、ウチらのこと忘れんといってください！」

笑顔で答えるヒラメ。

「忘れませんよ！ 着いたら手紙を書きますから」

「...ウチ、今日は用事があるからこれで失礼します」

「そうですか。残念だけど、みんなが待ってるから...ではさよなら」
店を出ていく玉造。

「センセ、さいなら...」

.....

「...ヒラメちゃんは行かへんの？」

カウンターの中からヒラメに声をかけるチエ。

「うん。ちょっと頑張りすぎて疲れてしもた...もう、帰って寝るわ。チエちゃん、今日はほんまにおおきに」

「.....」

「オバちゃんも、みなさんも、どうもありがとうございました」

ヨシ江「いえ、こちらこそ...」

店を出ていくヒラメの背中。

「ヒラメちゃん！」

後を追いかけるチエ。

ヒラメ、走って逃げようとするが、すぐにチエに追いつかれる。

「...チエちゃん、なんもゆわんといて」

「ヒラメちゃん、ほんまにこれでええの？」

「ええねん、ウチ、この方がええねん」

そう言うヒラメの目には涙が溜まっている。

「センセ、明日出発するんやろ？」

「.....」

「明日、ウチと一緒にセンセとこ行こ」

「.....」

「ウチ、知ってんねんで...ヒラメちゃん、こないだからずっと、センセにあげる絵描いてたやろ」

「.....」

「その絵、渡しに行こ」

「ウチ...」

「明日、ウチ、ヒラメちゃんの家に行くから、一緒にセンセとこ行こ！」

* * *

日曜日。

玉造先生の住むアパートを訪ねるチエとヒラメ。

小鉄とジュニアもすこし後ろに並んで立っている。

インターホンを鳴らすが、返事はない。

チエ「もう出てしもたんやろか」

ヒラメ「表札もなくなってるし...もう行ってしもたんやわ」

チエ「追いかけよ。まだ飛行機には乗ってないやろ」

ヒラメ「そんなん、無理やわ。どこにおるかわかれへんのに」

チエ「でも、このままやともう会われへんねんで」

ヒラメ「...チエちゃん、ウチのこと思ってくれてるのはよう分かるんやけど、もうええねん。

どうしたって、お別れはお別れやねんから」

チエ「あかん！

...ヒラメちゃん、センセのこと好きなんやろ」

ヒラメ「.....」

チエ「それだけはちゃんとゆうとかなあかん。...ゆわなあかんねん」

駅に向かって歩き出すチエ。

ジュニア「小鉄、どうする？ チエちゃんら、電車に乗って行くみたいやど」

小鉄「乗りかけた船や。最後まで見届けるんや」

第四話終わり

(第五話 空港にて...の巻につづく)

第五話 空港にて...の巻

西萩駅 で切符を買うチエとヒラメ。
たまたまそこを通りかかったテツ。

「チエー！ ヒラメ！ なにしとるんや」

チエ「見たら分かるやろ。電車乗るんや」

テツ「遊びに行くんか。ワシ、今日はヒマヤから、付き合ったってもええど」

ヒラメ「遊びに行くんとちゃうけど...」

チエ「ついてきてもええで。テツ、ヤケクソのときは役に立つこともあるから」

テツ「なんや、バクチの大会にでも行くんか」

チエ「一か八かの勝負なんや」

テツ「面白そうやんけ。ワシもついて行こ」

三人で電車に乗りこむ。

同じ電車の屋根の上に飛び乗った小鉄とジュニア。

ジュニア「チエちゃんら、どこに向かっているんやろ」

小鉄「あのセンセ、フランスに行くてゆうてたな」

ジュニア「フランス！ フランスまで追いかけるつもりか」

小鉄「アホ、そんな金あるかい。行くとしても空港までやろ」

ジュニア「空港なんか行くの初めてや。オレらも入れるんか」

小鉄「それは行ってみなわからんな...まあなんとかなるやろ。ワシら人間とは違って金は要らんからな」

* * *

電車の中を歩き回る三人。

テツはヒラメの描いた人物画のスケッチを手に持っている。

異様な三人の様子（特にテツ）を眺める乗客の困惑した顔。

テツ「チエ、ワシら、こんなことしながらどこまで行くんや」

チエ「余所見せんとちゃんと探してや。顔は覚えたやろ」

テツ「こいつに何か用あるんか。ワシがどついたらええんか」

チエ「うちの学校のセンセや。変なことしたら承知せえへんで」

テツ「セン公か。クソマジメな面しやがって」

チエ「いらんことゆわんでええ！」

ヒラメ「オツちゃん、ごめんな...」

* * *

空港までやってきた三人。

テツ「チエー、おまえ外国でも行くつもりか」

チエ「ヒラメちゃん、急ぐんや。間に合わんかもしれへん」

ヒラメ「チエちゃん、無理やわ。こんなところで、みつかるわけないもん」

「うち、一番向こうの端から探してくるから」

そう言うが早いかダッシュするチエ。

空港ロビーに駆け込み、乗客を片っ端から見まわり始める。

チエに続いて、空港ロビーに入った二匹の猫。

小鉄「ワシはこの辺り見とくから、ジュニア、おまえあっち探せ」

ジュニア「分かった」

.....

乗客「おい！ 猫がロビーの中を走りまくっとるとど」

職員「はよ捕まえろ！」

乗客「二匹や！ 二匹おるぞ！」

空港に「迷い込んだ」猫の捕獲を巡って、空港ロビー内が騒然とする。

残されたヒラメとテツの二人。

テツ「なんや、ごっつい建てモンやなあ...ワシ、こうゆうとこ苦手なんや。ヒラメ、道分かっとるんやろな」

ヒラメ「うちも初めて来たから...」

テツ「ワシ、おまえの後ついていくからな。迷わんといてくれよ」

ロビーに到着したヒラメ、今日のフライトを確認するため、カウンターに向かう。

「！」

カウンターに玉造先生の姿を発見。

「.....」

棒立ちになって絶句するヒラメ。身体がわなわなと震える。

テツ「なんや、ヒラメ。シヨンベンでもしたいんか」

ヒラメ「オ、オッちゃん...あの人...」

テツ（玉造の方を向いて）「なんや、あいつ、おまえらが探してた奴ちゃうんか」

テツ（玉造に向かって）「こらー！ ヒラメの担任！」

（ヒラメ「担任やないけど...」）

玉造、驚いて振り向く。

玉造「平山さん！」

ヒラメ「センセ...」

ヒラメの方に歩いてくる玉造。

玉造「わざわざこんなところまで来てくれたんですか？」

ヒラメ「ウチ...、ウチ...」

玉造「（腕時計を見ながら）まだ出発まで一時間くらいあります。せっかくだから、そこでお茶でも一緒にどうですか？（テツの方を見て）この方は？」

テツ「おまえ、こないだ店に来とった奴やろ。ワシ、あの店の主人のテツじゃ」

玉造「そうなんですか。あのときはお世話になりました。...でも、あの日、あなた、いらっしゃいましたっけ？」

テツ「声聞いたら分かるわい」

玉造とヒラメ「？」

* * *

空港内を探し回るチエ。

「あかん、はよ見つけな...飛行機が出たらもう終わりや」

「小鉄、見つかったか」

（小鉄「このあたりにはおらんみたいやで」）

ジュニアが走ってくる。

（「見つかったど！ あそこの店の中や！ ヒラメちゃんとテツと一緒にや」）

ジュニアの後を追いかけるチエと小鉄。

（ジュニア「あそこや！」）

ガラス張りの喫茶店の中に、ヒラメと玉造とテツの姿を発見するチエ。

テツはチョコレートパフェを食べながら上機嫌。ヒラメはこわばった表情で座っている。玉造は背中向きになっていて表情は分からない。

「姉ちゃん！ その猫捕まえてくれ！」

空港の職員が叫びながら近づいてくる。

「あんたら、捕まらんようにどっかに隠れとき」

そう言い残して喫茶店に入るチエ。

(ジュニア「どっかて言われても、隠れるとこなんかないやんけ」)

(小鉄「とりあえず逃げるんや。捕まったら保健所行きやど」)

「チエちゃん！」

ヒラメがチエの姿を見つける。

「おーい！ チエ！ おまえも仲間入れ！」

テツが叫ぶ。

振り返る玉造。

「ああ、こんにちは。あなたも来てくれたんですね」

「テツ、ちょっとウチと一緒にあっち行こ」

テツの手を引いて立ちあがらせようとするチエ。

「なんやねん、おまえもなんか頼んだらええやんけ。こいつのおごりやど」

「なにゆうてるねん！ ええから、ウチとあっち行こ。ウチ、テツに見せたいもんあるんや」

「じゃあ、私たちも出ましょう」

そう言って立ちあがる玉造。

「い、いえ...センセたちはここでゆっくり」

「ええねん。ウチも出るわ」

「ヒラメちゃん...」

喫茶店を出る四人。

* * *

空港ロビー。

搭乗口への入り口の前に立つ三人。少し離れたところに立っているテツ。

玉造「平山さん、竹本さん。わざわざこんなところまで来てくれるなんて思ってもみませんでした。ありがとうございます。本当に嬉しかったです」

ヒラメ「.....」

チエ「センセ、実は...」

チエが言いかけたとき、ヒラメがそれを遮るように口を開いた。

ヒラメ「センセ！ ...センセ、ウチ...画家になりたいんです」

玉造「...そうですね。平山さんなら、きつとなれます。私、正直に言いますが、平山さんの絵がとても好きでした。平山さんなら、きっとスバラシイ画家になれます。将来、どこかでお会いすることもあるかもしれませんね」

ヒラメ「ウチ、いつか、画家になったら、センセに会いに行きます」

玉造「私も、楽しみにしています。いつか、どこかで、必ずお会いしましょう。私も、平山さんのことを待っていますから」

ヒラメ「...センセ、さいなら」

玉造「さよなら、平山さん。竹本さん。それでは、またいつか」
二人に背を向けて、歩き出す玉造。

* * *

そのとき、空港の職員に追いかけられながら、二匹の猫が走ってきた。

「こらー！ 待て、このドラ猫！」

（小鉄・ジュニア「チエちゃん！ ヒラメちゃん！ 忘れ物や！ さっきの店にこれ忘れてきたやろ」）

チエ、小鉄からスケッチブックを受け取る。

歩いていく玉造を追いかけるチエ。

「センセ！ これ、ヒラメちゃんからのプレゼントです！」

ヒラメが描いたスケッチブックを渡す。表紙には「玉造先生」と鉛筆書きの文字がある。

驚いた顔の玉造。

「ありがとう。後でゆっくり見せてもらいます...では」

足早に歩き去る玉造の背中に叫ぶチエ。

「センセ！ ヒラメちゃん、センセが好きやったんです！」

足を止め、振り向く玉造。分かっている、というようにゆっくりと頷く。

その目には、涙が光っていた。

再び前を向き、搭乗口へ歩いていく。

しばらく立ち尽くすチエ。

* * *

チエが戻ってくると、ヒラメと二人の空港職員が二匹の猫を前に押し問答していた。

割って入るチエ。

「どうもすみませんでした。二匹ともうちの猫です。責任持って連れて帰ります」

職員A「あんた、こんな凶暴な猫、放し飼いにしたらあかんで」

職員B「捕まえようとした警備員みんなどつかれたんやから」

テツ（独り言のようにそっぽを向いて）「おまえらが何十人かかっても無理じゃ。こいつら捕まえたかったらマシンガン持って来い」

チエ（二匹を睨みつけて）「あんたら、ちょっとやりすぎたんちゃうか」

（小鉄「チエちゃん、ゆうとくけど、やりすぎたんはこいつやで。ワシは抵抗せんとひたすら逃げてただけなんやから」）

口笛を吹いているジュニア。

* * *

帰りの電車の中。

金網のついた籠の中に入れてチエの足元にいる小鉄とジュニア。

（ジュニア「狭苦しいなあ...これやったら電車の屋根におったほうがましや」）

（小鉄「文句ゆうな。ワシ、もうクタクタやからこの方が有難いわ」

テツは車両の向こうの方で、ヤクザの隣に座って遊んでいる。

並んで座席に腰掛けているチエとヒラメ。

チエ「...ウチ、えらい出しゃばったことしてしもたやろか」

ヒラメ「ううん、そんなことない。チエちゃんのおかげで、ウチ、言いたいこと全部ゆえたから」

チエ「.....」

ヒラメ「チエちゃん、おおきに...」

走って行く電車。その上空を飛んでいく飛行機。

第五話終わり

第六話 あの頃の二人...の巻

部屋で寝ているテツ。隣にはチエが寝ている。

テツが寝言を叫び出す。

「こらー！ やめんかい、なにするんじゃー！」

「なんやなんや」

「どうなっても知らんからなー！」

その声で目を覚ますチエ。

「どんな夢見てるんや...」

テツ（寝言で）「ヨシ江ー！」

チエ「お母はんの夢か？」

チエ、テツの肩を揺さぶって目を覚まさせようとする。

テツ、目を覚まし、目の前にあるチエの顔を見て叫ぶ。

テツ「ヨシ江ー！」

チエ「ウチや！ 分からんのか」

テツ「ヨシ江！」

チエ「ええかげんにしいや」

テツの頭をはたく。

.....

チエ「...まったく、何の夢見てたんや」

テツ「...それより、おまえ、なんで今じぶんまで寝とるんじゃ。学校サボる奴は不良やど」

チエ「今日は試験休みや」

テツ「ウソつけ...そんな休みあるかい」

チエ「高校にはあるんや。ウチ、最近毎日夜遅うまで勉強してたやろ」

テツ「知るかい」

チエ「テツはさっさと寝てたから知らんかっただけや。...ウチ、ここ何日かほとんど寝てないから寝不足やねん。今日はゆっくり寝さして」

再びフトンにもぐりこむチエ。

テツ「こらー！ 昼間から親子で寝とったら体裁悪いやないか」

チエ「いまさらなにゆうてるねん...体裁悪いのはどっちや」

テツ「この眠り虫...」

チエ（テツの方に寝返りを打って）「それより、さっきどんな夢見てたん？」

テツ「もう忘れたわい」

チエ「お母はんの名前叫んでたけど」

テツ「うるさい！ 思い出さすな！」

チエ「二人が付き合ってた頃の夢？」

テツ「ワシ、ちょっと出かけてくる」

家を飛び出すテツ。

「なんや、ワシ、昔の夢なんて見たことなかったのに...弱気になってきとるんかな」

「よりによってヨシ江の夢なんて.....あかん、どっかで一発ケンカして気分戻さな」

「しかし...ワシ、ここらでちゃんと考えとかな、これからもうええことないんとちゃうか」

ブツブツ言いながら歩いていくテツ。

* * *

場面は一気に変わって、20年以上前の西萩。

ホルモン焼き屋「キクちゃん」。

店の前を掃除するキク。

材料の仕入れから自転車で帰ってくる三平（オジイはん）。

三平「おい、テツはもう帰ってきたか」

キク「.....」（無視して掃除を続ける）

三平「おい」

キク「なんですねん」

三平「テツは帰ってきたかて聞いとるんや」

「見たらわかりますやろ」

（店の中に入って）「...あいつ、今日は夕方までに帰ってきて店手伝うてゆうてたんやけどな」

（ため息交じりに）「あんた、いつになったら分かりますんや。テツのゆうことなんかまともに

聞いとったら耳がいくつあっても足りませんわ」

「せやけど、昨日おまえに約束してたやないか」

「あんなもんいつものことですがな...まあ、晩ご飯までには帰ってきますやろ。ご飯だけは忘れたことありませんからな」

「...でも、あいつ最近、ちょっと違ってきたと思わんか」

「何がですねん」

「せやから、最近ちょっと...自覚がでてきたとゆうか...」

「.....」（無視。）

「あいつ、ああ見えても、やっぱり、そろそろ心の準備を...その...身を固める...」

「寝言ゆうのもええかげんにしなはれや」

「おまえには分からんのか...そういう男の気持ちが」

「別に、分かりたくもおませんわ」

「せやけど、付き合いはじめてもう5年にもなるんやから...あいつももう立派な大人やし」

「今日あたり振られて泣きながら帰ってくるんやおまへんか」

「そうゆうコワイ冗談はやめてくれ...心臓に悪い」

「ヨシ江はんも、花井センセの紹介があった手前、あんまりすぎなくすると悪い思てるだけかもしれまへんで」

「しかしそれで5年も続くかなあ...」

「あんさんも、いらんこと考える暇あったら、今日の店の売上でも計算してなはれ」

「今日、店これからやがな」

「そのほうがよっぽど現実的やゆうことですわ」

ひょうたん池。

ベンチに寝転がっているテツ。

「遅いな...あいつ、昼過ぎに待ってるてゆうたくせに...また遅れてきて、忙しいことアピールしてええカッコする気やな」

「どうでもええけど、いっつもこんな目立つ場所で待ち合わせすんの、ええかげん止めてくれんかな...知ってる奴に会うたら気まずうてしゃあないやんけ。こんなときだけはヤクザには会いたないな...」

目を閉じていつのまにかうとうとする。

.....

目を覚ますと、寝転がった頭の上の方に編物をしている手が見えた。

「な、なんや...もう来てたんか」

ガバッと起きあがるテツ。

「目エ覚めた？」

にっこりするヨシ江。

「ボ、ボク、どのくらい寝とったんや」

「わたしが着いてから、1時間くらいかな」

「き、君...、1時間もずっとそこに座とったんか」

「起こしたほうがよかった？」

「当たり前やんけ。ほんまに、おまえ...いや、君の神経はいつまでたっても...」

「それで、今日はどうする？」

「どうする、て...会おうゆうたん君やんけ」

「じゃあ『防空壕』でも行く？」

(「またかい...ワシはもうちょっと、こう...おい、もう歩き出しとるやないか!」)

慌ててヨシ江のあとを追いかけるテツ。

しばらく並んで歩きながら、いつもより近くに寄ってくるヨシ江。

緊張して固まるテツ。

「ちょ、ちょっと近すぎるんちゃうか」

「ええやない。今日は花井センセおらへんから」

「き、君、二人だけのときはいつも...」

「じゃあ、今日は竹本君にリードしてもらおかな」

「リード？」

「そう。どっか連れてってくれる？」

「ど、ど、どっかて...」

「どこでもええよ」

「.....」（完全に思考不能状態に陥っているテツ。）

「やっぱり『防空壕』にしようか」

* * *

喫茶「防空壕」。

いつもの席に向かい合わせに座る二人。ヨシ江はコーヒー、テツの前にはチョコレートパフェ。

ヨシ江「...竹本君、やっぱりご両親のホルモン屋継ぐの？」

テツ「君、い、いきなりそういう難しい話を...」

ヨシ江「難しいかな...わたし、竹本君のことうらやましいんよ」

テツ「なんでや」

ヨシ江「わたしとこ、お父はんもお母はんもおらんから、竹本君とこみたいに家族で働いてるの
見ると、ええなあて思うんよ」

テツ「そ、そうかな」

ヨシ江「わたし、竹本君のお母はん好きや」

テツ「あんなクソババ...いや、君は知らんだけで、ほんまはメチャメチャな奴やねんから...ほん
まに」

ヨシ江「あんなふうになんか色々なことはつきりゆうてくれる人、わたしの周りにおれへんから」

テツ「ゆうていらんわい...いや、その、とにかく君が思ってるのとは違うんやで」

ヨシ江「...わたし、竹本君のお母はんとなら、うまくやっていけるかも」

テツ「もう、そうゆう身体に悪い話はやめへんか...」

* * *

「防空壕」を出て、公園を二人で歩くテツとヨシ江。
向こうの方に、ミツルとアケミの姿が。

テツ「あれ、ミツルとアケミやないか」

ヨシ江「ほんまや」

テツ「あいつら、ワシの知らんところで...」

アケミ、テツとヨシ江を発見する。

「テツちゃん！」

ミツルの「しまった！」というような顔。

テツ「おまえら、ヒマなやっちなあ。昼間からやることものうてフラフラとつるみやがって」

アケミ「テツちゃんも人のこと言えないじゃない。なによ、ヨシ江なんかとデレデレしちゃって」

テツ「いらんことゆうな！ おまえ、なに標準語なんか使てるねん。カッコつける気やったら勘違いもええとこやど」

アケミ「業界では大阪弁だとやりにくいから、普段から練習してるのよ。最近、大阪と東京の往復で忙しくって...今日は久しぶりの休みなの。よかったら、二人も一緒に遊ばない？ ヨシ江はいやだろうけど」

ヨシ江「いえ、わたしは...」

アケミ「じゃあ、今から難波でも行こうか。なじみのいい店があるのよ」

ヨシ江「わたしはちょっと用事が...」

アケミ「なんだ、残念。テツちゃんは行くわよね？」

「.....」

無言でテツを見つめるヨシ江。アケミとの板ばさみになって、しばらく答えに窮するテツ。

テツ（頭を掻きながら）「ボ、ボクも用事が...」

アケミ（呆れた顔で）「なにがボクよ！ 意気地なし！ ...ミツル、じゃあ行くわよ」

背を向けて歩き出す。

ミツル「アケミ、なに怒ってるんや...テツちゃん、じゃあ、悪いけど」

アケミの後を追いかけるミツル。

残された二人。

ヨシ江、テツの腕を引っ張る。

「...竹本君、ちょっと」

テツ「な、なんや」

木の茂った林に歩いていく二人。
木陰で立ち止まり、テツの方に振り向くヨシ江――

「！」

* * *

「！」

全身にびっしょり冷や汗をかいて、ひょうたん池のベンチで目を覚ますテツ。

「あかん...なんちゅう夢見るんや」

「よりによってあんな...。そうや...ワシ、あの日、帰り道に足踏み外してドブに落ちたところ、ヤクザに見つかってボコボコにされたんや」

「そのあと一ヶ月くらいケンカできんようになって、逃げ回ってたもんな...」

「やっぱり家帰ろ...こんな日にヤクザに会ったらおわりや」

* * *

家に戻ってきたテツ。

奥の部屋の障子を開ける。

フトンで熟睡しているチエ。

「なんや、まだ寝とるんかい...眠り病にでも罹ったんか。あんまりグータラしとったら男に愛想つかされんど」

オジイはんが材料を持って店に入ってくる。

「なんや、テツ、おったんか」

「おったんかやあるかい...チエが大変なんや」

「チエが？ どないしたんや」

「今朝からずっと寝込んどるんや。見てみい」

そう言って障子を開ける。

「！ チェ！ 大丈夫か」

「ワシ、医者呼びに行くからとりあえず足代と医者代くれ」

手を差し出すテツ。

「おまえ、こんなときに金の話なんか...」

「こんなときやから金が要るんやないか！ いま金の話せな、いつするんじゃ！」

とりあえず金を握らせるオジイはん。

駆け足で店を飛び出すテツ。

「ヒャッホー！ 助かった！ ...今日はこれでどっか泊まったろ。

こんな日にヨシ江と顔会わしたら、ワシ一生ケンカできんようになってまうからな」

* * *

部屋の中。

チェ「まったくもう.....」

オバアはん「オジイはんが血相変えて戻ってきたから、何事かと思いましたわ」

オジイはん「チェがこんな時間に寝てるもんやから、ワシ、てっきり...」

チェ「グータラで悪うございましたね...それで、テツは？」

オバアはん「まさか医者代渡したんやおまへんやろな」

オジイはん「せやから、ワシ...」

(チェ「あかん、完全に渡してる」)

オバアはん「今晚は帰ってけえへんかもしれませんな」

チェ「どっかでええもんでも食べて来るんとちゃうか」

オバアはん「このままでは腹の虫がおさまりまへんな...なんか一つギャフンと言わせたらな」

チェ「...それができるのは、今日はやっぱりお母はんやろな...」

オバアはん・オジイはん「??」

* * *

夜。

店が終わり、チエとヨシ江が寝静まった頃を見計らって帰ってきたテツ。

「なんじゃい、駅前の安ホテルのくせにアホみたいな値段つけやかって...ワシ、ゼロの数間違えとったやないか」

「腹立ってカウンターの生意気な奴らどついたら、ヤクザ呼んでくれたのはええけど、ワシの顔見ただけで逃げやがって...調子戻し損ねたやんけ」

店の戸を開けると、奥の座敷の明かりはまだついている。

「なんや、まだ寝てないのか...」

部屋に入ろうかどうか迷っていると、障子戸が開いた。

ヨシ江「おかえり」

「ドキッ！」

テツ「なんや...チエはもう寝とるんか」

ヨシ江「夕ごはん、用意してますさかい」

部屋に入るテツ。

ちゃぶ台の横にはフトンが二枚敷いてある。

テツ「な、なんや...おまえ一人か」

ヨシ江「チエ、今日はお母さんここに泊まるゆうて、さっき一緒に出て行きましたわ」

テツ「ちょっと待て...。ということは...」

ヨシ江「なんですか」

テツ「な、なんですかやあるかい」

ヨシ江「それより、今日はチエに色々変なこと聞かれて困りましたわ」

テツ「なんじゃい」

ヨシ江「...わたしらの昔の話ですわ」

テツ「なにー！ ...なんちゅう悪趣味な奴や」

ヨシ江「あの子、わたしに、今日のはあんたのこと『竹本君』て呼んでくれやなんて...」

テツ「！！ ア、アホなことゆうな」

全身に冷や汗をかくテツ。

ヨシ江「...でも、なんか懐かしかったですわ」

ハアハア言いながら、完全に息が上がっているテツ。

ぎこちない動作で機械的にご飯を口に運ぶ。

ヨシ江「...久しぶりやね、この部屋で二人でゆっくりするのも」

テツ「そ、そ、そうやな...」

ヨシ江「なんか昔を思い出すね」

テツ「む、昔ね...」

ヨシ江「さっき、わたしが今のチエぐらいやった頃のこと思い出してね...」

テツ「.....」

* * *

オバアはんの家。

フトンを並べて横になるチエと菊。

チエ「あの二人、今頃どうしてるかな...」

菊「たまにはええ刺激になりますやろ」

チエ「テツ、一ヶ月くらいケンカのできん体になるとちゃうやろか」

菊「そうなってくれたらしめたもんですわ」

* * *

プラカードを持って立っている小鉄。

「その夜、竹本家の部屋の明かりは一晩中消えることはなかった——」

(小鉄「今回の出番はこれだけかい...」)

* * *

次の日の朝。

ホルモン屋を三步出たところで倒れていたテツを発見した通行人からの通報を受けたミツルが、オバアはんの店にテツを連れてきた。

.....

オバアはん（座敷で寝ているテツを見ながら）「...ちょっと薬が効きすぎましたかな」

チエ「...完全に力尽きた感じやな」

ミツル「一体なにがあったんや」

そのときテツがうわごとを叫んだ。

「こらー、ミツルとアケミ！ そんなところで昼間からなにしとるんやー」

ミツル（焦った様子で）「なんやなんや」

テツ「ワシもおまえらと一緒に行くー」

チエ「...なんの夢やろ」

テツ「や、やっぱりボク用事が...」

チエ（ずっこけながら）「ボ、ボクで...」

しばしの沈黙の後...

テツ「ヨ、ヨシ江君ー！」

第六話 終わり

第七話 チエ 怒りの剛速球?!の巻

西萩高校。放課後。

同級生で女子ソフトボール部のキャプテンをしている景山さんに声をかけられたチエ。

チエ「...で、話て？」

景山「今度、うちの高校と立花高校が試合するんやけど、チエちゃんにも出てほしいねん」

チエ「ウチ、部員とちゃうで」

景山「もう登録しといたから、大丈夫。四番サードで出てもらうことになるから」

チエ「登録て...ウチまだ返事してへんやん」

景山「頼むわ。今度の試合は絶対負けられへんねん。チエちゃんだけが頼りやねん」

チエ「そんなことゆわれてもなあ...」

* * *

一緒にソフトボール部の部室に向かう。

景山「チエちゃんのユニホームはこれやから」

チエ（あきれた顔で）「もうユニホームまであるんか」

景山「今から練習始まるから、よかったら出て。チエちゃんやったらいきなり試合でも大丈夫や思うけど」

チエ「い、いちおう出るわ。チームの人の顔ぐらい覚えとかなあかんから」

(「それにしても強引やなあ...みんな試合のときだけウチのこと呼び出してからに...

陸上部の大会に出てしもたのがそもそもの発端やな。ウチは校内のお助け少女やないで」)

ユニホームに着替えるチエ。

なにかロッカーの向こうでカシャッという物音がする。

「なんや...誰かおるんか」

部屋の中を見まわるチエ。

「気のせいかな...」

* * *

グラウンドに出て、準備体操を始めるソフトボール部の部員たち。

チエも一緒にランニングに加わる。

部員A「竹本さんも出るんや。やったー！ これで勝てるわ」

部員B「試合はチエちゃんだけでやるんやないで。あんたらもちゃんと練習せな」

監督の体育教師瀬久原は、ピッチャーの景山につきっきりで投球指導をしている。

他のメンバーは自分たちで練習をこなす。

他のメンバーたちと練習しながら、瀬久原と景山の様子がなんとなく気になるチエ。

部員B「...チエちゃん、あの二人、やっぱり変やと思う？」

チエ「い、いや、別に...」

景山の腰に手を回してフォームの指導をしている瀬久原。

部員B「景山さん、ほんまは嫌がってるねんけど、そんな態度したらキャプテンとピッチャー降ろされるから、ゆわれへんねん」

チエ「.....」

部員C「あのセンセ、景山さんだけやのうて、他の部員にもしょっちゅうやらしいことゆうたり、体触ったりするんや」

部員D「チエちゃんも、気をつけたほうがええで」

チエ「.....」

* * *

練習が終わり、帰途につく生徒たち。

部員A「なんか、いやになってくるわ。竹本さんて、ふだん練習もしてないのに、ウチらよりずっと上手いんやもん」

部員B「元々の運動神経が違うんや」

チエ「そんなことない...ウチももっと練習せな」

部員C「チエちゃん、明日もノックしてな。監督、景山さんのことばかりで、ウチらの練習いっこも見てくれへんから...」

チエ「うん。...あれ？」

カバンにつけていた赤いポッチリがなくなっていることに気づいたチエ。

「あ、ウチ、部室に忘れもんしたかも。みんな、先に帰っといてくれる？」

* * *

部室に戻るチエ。

ドアのノブに手をかけると、鍵が開いている。

(「...誰かおるんかな」)

中に入ると、景山と瀬久原がいた。

景山「！」

瀬久原「なんや、竹本か...どうした」

チエ「...ちょっと忘れもん取りにきたんです」

自分のロッカーを開けると、中にポッチリが落ちていた。

「やっぱり」

ポッチリを拾い上げ、すぐに部室を立ち去ろうとするチエ。

景山「チエちゃん、待って！　ウチも帰る！」

慌ててチエの後を追いかける景山。

部室に一人取り残される瀬久原。

景山「チエちゃん、来てくれて助かったわ」

チエ「どうゆうこと？」

景山「.....」

俯いて黙り込む景山。

チエ「どないしたん？」

景山、チエの肩にすがって泣き始める。

* * *

次の日。

放課後、ソフトボール部の練習。

チエ（全員の前で、瀬久原に向かって）「センセ、ウチ、ピッチャーやりたいんです」

景山「?!」

瀬久原「なんや、いきなり...おまえ、景山よりもええ球投げれるんか」

チエ「センセ、バッターになって、どっちの球がいいか見てくれませんか」

景山「.....」

バッターボックスに入る瀬久原。

「よし、じゃあまず景山から投げろ」

速球を投げ込む景山。2球続けて空振りする瀬久原。

部員A「ごっつ速いわ」

部員B「気合入ってるな、景山さん」

しかし、3球目を瀬久原は真っ芯でとらえて、クリーンヒットを飛ばす。

部員C「ちょっとコースが甘かったな」

悔しがる景山。

「次、竹本投げて来い」

「いくでー！」

肩をぐるぐる回してほぐした後、1球目を投げ込むチエ。

「バシッ！」

剛速球がキャッチャーネットに突き刺さる。

部員A「なんや...今の球」

部員B「...全然見えへんかった」

キャッチャー（手を腫らしながら）「こんな球受けるのイヤや...」

啞然とする瀬久原。

景山（独り言で）「チエちゃん…」

2球目。

「そりゃっ！」

「ズコッ！」

「くうー！」

全員注視の中、股間を抱えて蹲る瀬久原。

チエ「あかん、手元が狂ってしもた」

景山「チエちゃん、まさか…」

チエ「ウチ、全然コントロールあかんわ。ピッチャー失格や」

瀬久原（蹲りながら涙目で）「竹本ー！ おまえ、いまの、わざとちゃうんか！」

「許さんど！」

チエ「許さんのはこっちや！」

足元に置いてあったカバンから隠しカメラを取り出すチエ。

「これ、なんやのん」

「！」

焦る瀬久原。

チエ「さっき部室の天井にはめてあったの見つけたんや」

部員たちの間でざわめきが起こる。

チエ「景山さん。いまから一緒に校長室行こか...警察でもええけど」

瀬久原「.....」

景山「チエちゃん、もうええねん...うちの高校が出場停止になったらみんなに迷惑がかかるから」

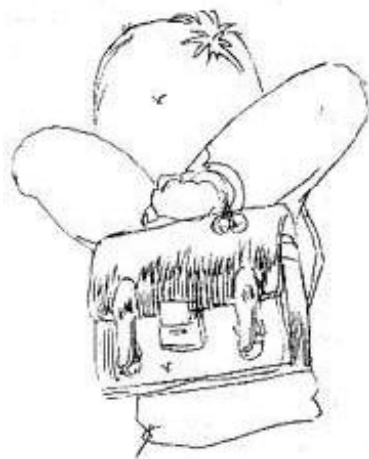
景山に駆け寄る他の部員たち。

「景山さん、何があったん？ みんなに話聞かせて！」

チエ（景山に）「ウチ、店やらなあかんから、今日はもう帰るわ。...あとはどうするか、みんなで話し合って決めて」

グラウンドを去るチエ。

バッテリーボックスに蹲ったままの瀬久原。



ホルモン屋「チエちゃん」。

ホルモンを焼くチエ。

「ただいまー」

テツが帰ってくる。

チエ「あっ、お父さん！」

思わずずっこけるテツ。

テツ「なにがお父さんじゃ...おまえ、最近言葉遣いが気持ち悪いど」

チエ「ほな、テツて呼んだほうがええの？」

テツ「それは...時と場合によるやんけ」

チエ「...お父さん、外でいやらしい遊びなんかしちゃイヤよ」

よろけてカウンターに頭をぶつけるテツ。

テツ「いきなり何を言い出すんじゃ！」

チエ「それだけがお父さんのいいところなんだから」

テツ「やかましわい！ ...気色悪いからもう一回りしてきたろ」

再び外に出る。

「チエもヨシ江も最近メチャメチャタチが悪くなってきよったな...ワシ最近いっつも関節がどっかおかしいのはあいつらのせいや」

「ワシがケンカ弱なってヤクザに殴りこみかけられたらどうするつもりや...」

ブツブツゆうテツ。

瀬久原がトボトボ歩いてくる。

「女はこわい...ワシ、これから毎日あんな調子で生徒から集団でいびりまくられるんやろか...」

すれ違いざまに瀬久原の頭をどつくテツ。

「シケた面しやがって...ワシ、おまえみたいな奴みたら腹立ってくるんじゃ」

「おまえみたいな奴が女をのさばらせるんじゃ、ドアホ！」

瀬久原（頭を抱えながら）「今日はふんだりけったりや...」

* * *

その横で...

年増のメス猫集団につきまとわれるジュニア。

歩いている小鉄を発見。

ジュニア（笑いながら）「小鉄一、助けてくれ。 オレ、最近この手のオバはんにもテてもテても
どうしようもないんや」

小鉄「...ワシにはもう縁もゆかりもない世界や」

「見つけたー！」

小鉄のもとに殺到するメス猫たち。

「なんやー ちょっと待てー」

「きゃー かわいい！ 照れちゃって」

「もおーつねっちゃう」

「こらっ こらっ」

.....

その横を通りすぎる瀬久原。

「この猫もワシと同じ目にあっとるんかなあ...」

第七話終わり

第八話 百合根の気持ちの巻

「チエちゃん」の営業中。
ホルモンを焼くチエ。

チエと同じ年くらいの若い男が入ってくる。

「いらっしゃい」
(「...なんか見覚えのある顔やな」)

「こんばんは。久しぶり」
「こんばんは...」
「父さんがいつもお世話になってます」
「え、えーと.....」
「お好み焼き屋で...」
「ああ...百合根君！」

.....

「...オッチャんに会いにきたん？」
「うん、そうだったんだけど...」
「？」
「店が閉まってて、会えなかったんだ」
「...今日、オッチャんところ、定休日やったかな」
「でも、いいんだ...今日は約束してたわけじゃなかったから」
「もう帰るのん？」
「うん。その前にちょっと...チエちゃんに挨拶しておこうと思って」
「そう...わざわざおおきに」
(「なんか同じ年くらいの男の子にチエちゃんてゆわれると照れるなあ...」)

「ウチ、今度オッチャんに会うたらゆうところか」
「いや、また明日も来るから」
「そんな毎日来て、大丈夫なん？ 学校あるんやろ」
「学校が終わってから来るから...じゃあ、今日はこれで。さよなら」
「...さいなら」
店を出て行くカオル。

* * *

次の日。

「こんばんは」

カオルが店に入ってくる。

「あっ、いらっしゃい」

「.....」

「...今日は会えたん？」

「うん」

そう言ったきり口をつぐむカオル。

（「なんかややこしいことでもあったのかな...」）

（「そうや...こうゆうときにはお母はんを呼ぶに限る」）

奥で晩ご飯の支度をしているヨシ江を呼びに行くチエ。

「お母はん...昨日ゆうてた、お好み焼き屋のオッチャンとこの子が今来てるねん」

「カオルさんですか」

「...なんか、ちょっと元気ないみたい」

「？」

「お母はん、話聞いたってくれる」

「なんかあるんやったらチエが聞いてあげたらよろしいやないですか」

「せやかて...ウチ、店やらなあかんし」

「カオルさんも、チエの方が話しやすいですやろ」

「ウチ、話聞いても力になれるかどうかわかれへんし...」

「それはわたしも一緒ですがな。店はわたしが見ときますさかい、奥で話したらどうですか」

* * *

奥の座敷。

チエ「...猫？」

カオル「父さんの飼ってる猫、知ってるよね？」

チエ「ジュニアのこと？」

カオル「あの縞模様の猫、ジュニアっていうのか」

チエ「ジュニアがどうかしたん？」

カオル「今日、僕が父さんの家に行ったら...まあ、立ち聞きした僕もよくないけど」

チエ「？」

カオル「...父さんが猫と話してたんだ」

チエ（冷や汗を流しながら）「ああ...オッチャン、ときどき猫に話しかけるクセあるから」

カオル「でも、一時間以上ずっと話かけてたんだよ」

チエ「まあ...たまにはそうゆうことも...」（汗）

カオル「なんか父さん、泣いてたみたいで...そのうち、猫が店から飛び出してきて...」

（チエ「なんの話してたんやろ...」）

チエ「それで、オッチャンとは話したん？」

カオル「なんか相当取り乱したみたいで...悪いと思ったから、また明日来るからって言ってすぐに出てきたんだ」

チエ「まさか、お酒呑んでたとか...」

肯くカオル。

カオル「父さん、普段もいつもあんな感じなのかな...」

チエ（焦った様子で）「そんなことない。普段はほんまええ人やねん。...ただ、猫のことになるとちょっと...」

カオル「僕と会うときには、いつも気を張って、しっかりしたところ見せようとしてるけど、本当は、父さん、いつも寂しい思いしてると思うんだ...。それで猫にあんな...」

チエ「.....」

カオル「僕、父さんと色々話がしたくて」

チエ「.....」

カオル「...チエちゃん、こんなこと急に頼んですまないんだけど.....」

チエ「？」

* * *

閉店後。

チエ「...ウチ、なんか気ィ重いわ」

ヨシ江「まあ、カオルさんがゆうんやから、そうしてあげた方がええんやないですか」

チエ「...ウチって、そうゆう星の下に生まれた少女なのかしら」

ヨシ江「なにゆうてますねん」

チエ「物心ついてから、こうゆう役回りになることが多いような気がするから」

ヨシ江「.....」（汗）

チエ（独り言のように）「ややこしい話はみんなウチのところに回ってくるんやから...自分の親だけでもたいがい苦労してるのに」

ヨシ江「あ、わたし、明日のご飯の支度が...」（店の奥に入っていく。）

その頃、ひょうたん池。

ジュニア「...小鉄、おまえ、こんなところに寝泊りしとるんか。...こんなところにおるくらいやったら、チエちゃんの家におっても変わらんやんけ」

小鉄「ほんまは遠いところに旅立ったりした方がカッコええのかもしれんけどな...ワシなりに色々考えたあげく、こうゆう結論になったんや」

ジュニア「これが先輩の言う男の生き様ってやつですか」

小鉄「おまえ、ワシを冷やかしにきたんか」

ジュニア「いや...冗談ですがな。気ィ悪せんといてくれ。...オレ、実は、今日ちょっとブルーなんや」

小鉄「なんや、オヤジに説教でも食ろたんか」

ジュニア「さすが師匠、何もかもお見通しで...」

小鉄「どこがブルーやねん。いつものことやないか」

ジュニア「いや...今日オレ、あんまりオヤジがしつこいから、キれて出て行ってしもたんやけど、そのときオヤジの息子とすれ違ったんや」

小鉄「カオルとかゆう子か」

ジュニア「オレ、しばらく店の外で様子見てたんやけど...」

.....

小鉄「それで、明日もう一回会いに来るわけか」

ジュニア「オレ、よう分からんねんけど、カオルがオヤジのところに戻ってくるゆうのは、ありなんか」

小鉄「ありなんかゆわれても...なんか手続きが要るんやないの」

ジュニア「人間の法律ではカオルはもうオヤジの息子やないんやろ」

小鉄「オヤジがそうゆうてたんなら、そうやろ」

ジュニア「でもオレ、ほんまは、息子がオヤジと一緒にあってくれたらええと思うんや...そしたらオレも、今みたいな猫離れした重圧背負わんでもええし」

小鉄「.....」

ジュニア「結局それが一番ええ思うねん」

小鉄「まあ、そのへんの話はワシらが立ち入ることと違うやろ...人間の家族は色々ややこしいからな...それで、ワシになんか用か」

ジュニア「これから、一緒にオヤジのところに行ってくれへんか」

小鉄「ワシ、もう人間の世界とは関わり持たんと思てたんやけどな...」

ジュニア「今晚、オヤジが調子おかしくして、明日ぶち壊しになったら、オレ、一生後悔するこ

とになるんや」

* * *

「かたぎ屋」。
二階の部屋で酒を飲んでいる百合根。
部屋の隅にいる二匹の猫。

小鉄「...もう手遅れやないの」
ジュニア「いや、まだ一升は越えてない...加減みて、酒瓶取り上げるんや」
小鉄「タイミング間違ったら命ないど」

階段の下から声が聞こえる。
「こらー！ おっさん、なに店さぼっとるんじゃー！」
「おるのはわかっとるんやどー、出て来い！」

小鉄「ぶち壊しのスペシャリストが来よったど」
ジュニア「オレ、行ってノバしてくるわ」

「おっさんー！ ワシ、今日から当分おまえとこ泊ったるからなー」
「もうあんな家帰ったらへんのじゃー」
階段を駆け上がってくるテツ。

ジュニア「カウンター！」
「！」

ジュニアの蹴りをまともに受けて、階段を転げ落ちるテツ。

* * *

次の日。

学校帰りに、「かたぎ屋」を訪ねるチエ。

「こんにちはー」

店の戸を開ける。

店の中には、誰もいない。

「おかしいな...休業のハリガミもないのに」

二階から降りてくる小鉄。

(疲れきった様子で)「ワシ、いつまで人間のことでこんな苦勞せなあかんねん...」

チエ「小鉄! ...ひょっとしたら、オッチャン、上におるんか」

(小鉄「おりますがな...」)

「おじゃましまーす」

家の階段を上がるチエ。

「チエちゃん!」

叫ぶ百合根。

「! なんや、オッチャン...なんちゅうカッコしてるんや」

着物の前をはだけ、ジュニアと向かい合わせに座っている百合根。

座布団の上には花札が散乱。部屋には一升瓶が転がっている。

「ワシ、ゆうべから寝られへんかったんや...」

「オッチャン、なにしてるねん! 店もやらんと、昼間から猫とバクチかいな!」

百合根を叱りつけるチエ。

(ジュニア「オレも、こんなつもりやなかってんけど...オヤジ、なんかで気ィまぎらせな、どこまで呑むかわからんかったから...」)

「でも、大丈夫や、朝からは酒は呑んでへん」

充血した目で訴える百合根。

チエ「...カオル君が見たら何てゆうやろな」

百合根「カオル! あいつ、ここに来てるんか」

チエ「今日、ウチ、オッチャンを難波に連れて行くように頼まれたんや。カオル君が、ご飯一緒に食べながら、話したいから...でも、その調子やと行かんほうがよさそうやな」

百合根「チエちゃん、待ってくれ! ワシ、今支度するから」

チエ「はよしてや...（部屋の隅にある布団をみながら）なんで、このフトン、こんなに盛り上がってるのん」

フトンをめくるチエ。

気を失ったままのテツが寝ている。

チエ（呆れ顔で）「帰って来えへんかった思たら、やっぱりここにおったんか...。オッチャンが酒呑んでテツどついたん？」

百合根「ゆうべ、気がついたら、そこで寝とったんや」

（小鉄「目エ覚まして暴れんようにワシが階段の下から引き上げて寝ずの番しとったんやで...」）

* * *

難波駅。

電車を降りてホームを歩くチエと百合根。

百合根「カオル、チエちゃんにどんな話したんや」

チエ「別になんも...ただ、今日オッチャンを連れてきてくれてゆわれただけ」

百合根「昨日、ワシ、ジュニアのことでずいぶん興奮してたから...いきなりカオルの顔見て、取り乱してしもて...」

チエ「どうでもええけど、カオル君の前では、猫の話はせんほうがええんとちゃう...」

改札に立っているカオルの姿を発見するチエ。

「オッチャン」

「.....」

考え事に耽っている百合根。

「オッチャン！」

「...な、なんや」

「なんややあらへん。ほら、あそこ」

「！ カオル...！」

改札を出て、駆け足でカオルに近づく百合根。

「すまんかったな...昨日はほんまにすまんかったな.....」

しばらくカオルの肩を抱きながら泣きじゃくる百合根。

少し離れたところで二人の様子を眺めているチエ。

しばらく百合根と二人で言葉を交わした後、チエのほうに近づいてくるカオル。

「チエちゃん、わざわざどうもありがとう。せっかくだから、三人で一緒にご飯でも...」

「おおきに。でもウチ、今日は店があるから、これで失礼するわ」

「チエちゃん、頼むわ、今日はワシにご馳走させてくれ」

慌てて駆け寄ってくる百合根。

チエ「でも、ウチ...」

百合根「今日はチエちゃんところ、定休日やろ。頼むわ。ワシ、いつもチエちゃんに世話になりっぱなしで...このままやとワシの気がすまんのや」

何度も何度も頭を下げる百合根を見て、根負けしたチエ。

* * *

<チエのモノローグ>

――結局三人で食事することになった

高そうな店やったから、ウチはあんまり落ち着かんかったけど、

カオル君はよく来てるみたいやった

食べてる間は、オッチャンが一人で喋ってた

ほとんどカオル君が小さい頃の話で、オッチャンの昔の話もあった

カオル君は楽しそうに聞いてたけど、

ときどき暗い顔になるときもあった

食事が終わると、オッチャンはカラオケに行こうと言い出した

ウチはあまり乗り気やなかったけど、カオル君がオッチャンに気いつこてるのが分かったから、

ウチもつきあうことにした

ここでもオッチャンは一人で歌いまくった〔赤い顔で歌っている百合根の絵。〕

ウチもつきあいで一、二曲歌った〔上機嫌で歌っているチエの絵。〕

カオル君はニコニコしながら聞いているだけやったけど、オッチャンに

「カオルー！ おまえも歌えー」

と言われて、

無理矢理歌わされてた〔チエとデュエットしているカオルの絵。〕

オッチャンはほんまに楽しそうやった

「ワシ、こんなに楽しいの、生まれて初めてや」〔百合根の上機嫌な顔。〕

なんて言うてたけど、

もしかしたらほんまなんとちゃうか...と思ったほどやった

何時間歌ったのか覚えてないけど、店を出て駅に着いたときはすっかり遅い時間になってた

「じゃあ、僕...」

てカオル君が言うたとき、

オッチャンはいきなり、はっと我に返ったような顔になって...――

* * *

「ああ...カオル、えらい遅うまで付き合わせてしもたな。...気ィつけて帰れや」

「うん...。じゃあ、また今度」

「お母さんとお父さんのゆうことよう聞いてな...」

手を振って、去っていくカオル。

* * *

黙ったまま並んで歩く百合根とチエ。

駅の切符売り場に歩いて行こうとするチエに声をかける百合根。

百合根「ワシ...もう一軒寄って帰るわ」

チエ「もう一軒で...あんまり遅なったら帰られへんようなるで」

百合根「ワシはタクシーで帰るから...チエちゃんは電車で先に帰ってくれ」

チエ「呑みすぎたらあかんで」

百合根「分かってる...チエちゃん、遅うまで付き合わせて、すまんことしたな」

チエ「かまへん。明日ガッコ休みやから」

百合根「今日は、ほんま楽しかったわ...おおきに」

チエ「.....」

背を向けて歩き出す百合根。

チエは、しばらく立ったまま百合根の背中を見つめていたが、

「オッちゃん、ウチも行くわ！」

百合根に向かって駆け出すチエ。

百合根に追いついて、その横顔を見たとき、チエは思わず立ち止まった――

それは、チエが初めて見る百合根の表情だった。

怒っているような、悲しんでいるような、それでいて、そのどちらをも超越したような...

* * *

並んで歩いている二人。

チエ「...ウチ、ちょっとカオル君の気持ち分かるねん」

百合根「.....」

チエ「ウチもテツに隠れてお母はんと会うてたことあるから」

百合根「.....」

チエ「お母はんと会うと、会ってる間は楽しくても、いつも帰りは元気なくなった...そうゆうときはこうゆうて自分に気合い入れててん」

百合根「？」

チエ（右腕を振りながら）「...明日になったらまた元気です。明日は明日の太陽がピカピカやねん！」

百合根「...チエちゃん、一緒に電車で帰るか」

チエ「？」

百合根「ええ子やな、チエちゃんは」

チエ「.....」

百合根（独り言のように）「ほんまにええ子や...」

* * *

次の日。

「かたぎ屋」二階。

テツと小鉄とジュニアが部屋に座っている。

テツ（じっとり汗をかきながら）「くそー、こいつらなんでずっとここにおるんや...。不気味やな...スキ見せたら殺されるんとちゃうか」

「こいつらのせいでワシ、いつまでたってもお好み焼き食いに降りられへんやないか...」

小鉄「ええ天気やなあ...今日は神明神社の縁日か...。こんな日は縁日にでも行ってのんびりしたいな」

ジュニア「.....」

小鉄「...ところで、なんでワシら、こんなうっとうしい男とずっと同じ部屋におらないかんのや」

ジュニア「オレかてこんなとこ居たないよ...でもオヤジが好きなだけ泊めたるゆうてるんや...せめて、いらんことしたらタダですまんゆうことはこいつに分からしとかんと」

小鉄「しかし、なんや気分が沈んでくるわ...一番縁を切りたい人間と一緒にいるゆうのは」

ジュニア「グチャグチャゆうんやったら出て行ってくれ。...オレ、とことん最後までオヤジに付き合うことに決めたんや」

小鉄「なぜかこんな役回りがつきまとうなあ...。ワシって、こうゆう星の下に生まれた猫なんかなあ...」

* * *

神明神社の縁日。

ベンチに腰掛ける百合根とヨシ江。

百合根「...チエちゃんは、ほんまにええ子ですわ」

ヨシ江「いえ、あの子、お邪魔やったんやないかて今朝も気にしてたんですよ」

百合根「ワシ、これまでの人生で色々あったけど...おたくらと知り合いになれたこと、一番感謝してますんや」

ヨシ江「こちらこそ、いつもご迷惑のかけどおしで...。今もうちの人...」

百合根「テツのことやったら、気にせんといてください。あいつが好きなだけ泊めたるつもりですわ」

ヨシ江「いえ、それは、ほんまに...」

百合根「あんさんとチエちゃんへのせめてもの恩返しですわ」

百合根とヨシ江を見つけて手を振るチエ。

チエ（二人に近づいてきて）「...テツの話？ 今日オッチャんのところにおるんやろ」

百合根「いや...チエちゃんが、ええ子やゆう話や」

チエ「なんやそれ...。あんまりいつまでも子供扱いせんといてや。ウチ、もう一人前のレディーやねんから」

百合根（笑いながら）「...それは失礼しましたな」

ヨシ江（諭すように）「そういう口のきき方は昔のまんまやないの」

百合根「ええんや...それがまたチエちゃんのええとこや」

ヨシ江「.....」

チエの笑顔。

ピーヒャラ ドンドンいう神社の祭囃子の音。

第八話終わり

第九話 チエの失恋？の巻

「かたぎや」。

店をしている百合根。その前でお好み焼きを食うテツ。

テツ「……」

百合根「……」

お好み焼きを食い終わるテツ。

百合根「…どうや、もう一枚食うか」

テツ「……」

百合根「足らんかったら遠慮せんでええど」

テツ「…怪しい」 (汗)

百合根「？」

テツ「おっさん、なんか企んどるな」

百合根「なんのこっちゃ」

テツ「いつもやったら、ワシが頼んでも焼かへんのに、なんでここ最近…」

百合根「アホなことゆうな。ワシがおまえになにを企むゆうねん」

テツ「このお好み焼きになんか入ってるんやないか、眠り薬とか…」

百合根「おまえ相手にわざわざそんな手の込んだことするかい」

テツ「たまにはお好み焼き以外のもんも食わしてくれ。毎日毎日お好み焼きばかり食ってたら体中メリケン粉になってまうからな」

百合根「…しかし、なんでおまえみたいな奴からチエちゃんみたいな子が生まれたんやろな」

テツ「どうゆう意味じゃ」

百合根「あの子がヨシ江はんの子やゆうのはわかるけど、おまえの血も半分入ってるとは思えんのか…チエちゃんてほんまにおまえの子か」

テツ「…こわいことゆうな。ワシ、いま本気で悩みそうになったやんけ」

百合根「いっぺん本気で悩んでみい」

テツ「こらー！　ワシが下手に出てる思たらええ気になりやがって」

店の戸が開いて、チエとヒラメが顔を出す。

チエ・ヒラメ「こんにちはー」

百合根「おお、チエちゃん、よお来てくれたな。ヒラメちゃんも、久しぶりやないか」

チエ「テツー、やっぱりここにおったんか」

後ろを向いているテツ。

ヒラメ（小声でチエに）「...オッチャン、どないしたん？」

チエ「なんかしらんけど、最近、ウチと話すのがイヤなんやて」

.....

ヒラメ「こないだのソフトボールの試合、チエちゃん、ほんまにすごかってんで。いきなり走者一掃の三塁打！」

チエ「あれは外野の返球が逸れたから...」

ヒラメ「結局、サイクルヒットに、最後は満塁からリリーフで投げて、三者連続三振や」

チエ「ヒラメちゃん、あんまりそうゆうことは...」

百合根「さすがやなあ。ワシも見に行きたかったわ」

テツ（後ろを向きながら独り言で）「なんや、自分ばかりええかっこしやがって...」

ヒラメ（テツに向かって）「オッチャンも、チエちゃんのカッコええところ見に来たらよかったのに...」

テツ「ワシ、帰る！」

百合根（嬉しそうに）「スネとるスネとる」

チエ「帰るて、どこに帰るんや」

テツ「うるさい！」

二階に上がって行くテツ。

チエ（テツの後姿を見ながら）「なんか訳わからんわ」

百合根「スネさしたらええんや。心配せんでも、ワシのところで面倒みたる」

チエ「でも、あんまり長いとオッチャンに迷惑やし」

百合根「なんやったら、チエちゃんもこの家に住んでくれてもええんやで」

チエ「あんまり笑えん冗談やなあ...」（汗）

お好み焼きを食べたチエとヒラメが店を出ようとする、百合根がチエを引き留めた。

百合根「チエちゃん、ちょっと話があるんや」

チエ「なに？ テツのこと？」

百合根「いや、そうやのうて...ちょっと」

ヒラメ「...ほな、ウチ、先帰るわ」

雰囲気を感じて、店を去って行くヒラメ。

店の中で二人きりになる百合根とチエ。

チエ（おそるおそる）「...なんの話？」

百合根「い、いや、その...今度の日曜日、カオルに会うんや」

チエ「...」

百合根「もしよかったら、チエちゃんも一緒に...」

（チエ「そうゆう話か...」）

百合根「それで...ワシ、遊園地でと思ってるんやけど...」

チエ「遊園地？」

百合根「そや...最近、近くにできたやろ。ワシもいっぺん行ってみたいと思てたんや」

チエ「ちょっとそれは...」

百合根「いや、チエちゃんがイヤやったらええんや。ワシ、せっかくやから一緒にと思てただけやから」

チエ「.....」

百合根「チエちゃん、カオルに会うのイヤか」

チエ「そうゆう問題やなくて...」

* * *

夜。店の前で掃除するチエとヨシ江。

ヨシ江「それで、行くことにしましたんか」

チエ「なんかよう分からんことになってきたなあ...」

ヨシ江「どうゆうことですねん」

チエ「だって、オッチャンとカオル君が会うのに、なんでウチが行かなあかんのん...しかも、遊園地やで」

ヨシ江「.....」

チエ「ウチとカオル君を合わせるためにオッチャンが仕組んだとしか考えられへんやん」

ヨシ江「仕組んだてことありませんやろ」

チエ「なんしか、変な感じやわ」

ヨシ江「……」

チエ「あかん、ウチ、明日はハッキリ言お。このままズルズルいったらますますややこしなるもん」

腕を伸ばして背伸びしながら店に入っていくチエ。

「…ウチは日本一気苦労の多い少女や」

チエの背中を見つめるヨシ江。

* * *

日曜日。

遊園地の入口。

百合根とチエが待っている。

カオルが現れる。

「！」

チエの姿を見て驚くカオル。

カオル「やあ…こんにちは」

ばつが悪そうな笑顔で会釈するチエ。

百合根「今日は三人で楽しくやろうや…カオル、小さい頃、遊園地好きやったやないか」

お互いの方をちらちら見ながら、なんとなく気まずそうなチエとカオル。

* * *

ジェットコースターに乗ろうとする三人。

乗車口の前で

百合根「ワシ、こうゆうの苦手やからやっぱりやめとくわ…カオル、チエちゃんと乗れや」

カオル「えっ？」

チエ「オッチャんが乗ろうてゆうたんやで」

百合根「ええがな、ええがな。ワシ、下で見とくから…ほら、もう出発するで」

二人の背中を押して無理に載せる百合根。

ジェットコースターが出発する。

上り道で

チエ「...カオル君、こうゆうの乗ったことある？」

カオル「小さい頃に何回か...」

チエ「得意？」

カオル「全然...。チエちゃんは？」

チエ「ウ、ウチ、初めてやねん」

ゴーッ！

ジェットコースターが落下を開始。

「ギャーッツ！」

叫ぶ二人。

* * *

げっそりした様子の二人。

チエ「ウチ...もうこうゆうのイヤヤ」

カオル「僕も...」

百合根（笑顔で）「二人とも一緒に仲良く叫んどったど」

百合根「次はお化け屋敷なんかどうや」

チエ「またー」

百合根「カオル、小さい頃好きやったやないか」

カオル「あんまり好きじゃなかったけど...」（汗）

* * *

お化け屋敷から出てくるチエとカオル。

チエ（真っ青な顔で）「怖かったー...。あれ？ オツちゃんは？」

カオル「途中ではぐれたみたいだけど...」

チエ（小声で）「まさか、お化けどついたんとちゃうやろな」

カオル「え？」

チエ「いや、別に...ほんま、どこいったんやろ？」

カオル「あ、あそこ！」

お化け屋敷の入り口の方から歩いてくる百合根。

百合根「すまんすまん。あんまり怖いから、入口に引き返して出てきてしもた」

チエ、カオル「.....」

百合根「そろそろ腹減ったな...飯でも食うか」

* * *

昼食を食べる三人。

「ワシ、ちょっとトイレ行って来るわ...」

席を立つ百合根。

そのまま10分以上たっても戻って来ない。

チエ「オッチャン、今日ウチが来るてカオル君にゆうてなかったん？」

カオル「うん...来てみたらチエちゃんがいるから驚いたよ」

チエ「...なんか変やと思わへん？」

カオル「？」

チエ「オッチャン、ウチらを二人きりにさせたがってるような気ィする」

カオル「...そうかな」

チエ「誘われたときからなんとなく変な感じはしてたけど」

カオルの表情が曇る。

「...チエちゃん、迷惑かけてごめん」

チエ（焦った様子で）「いや、別に迷惑とは...」

カオル（俯いて）「父さん、よく思いが先走ってカラ回りする人だから」

チエ「オッチャン、ええ人やねんけど...」

カオル「.....」

チエ（小声で）「カオル君、ちょっと相談があるねん」

カオル「？」

二人が顔を近づけてひそひそ話するのを柱の陰から見ている百合根。
まんざらでもない表情。

* * *

夕方。

三人で観覧車に乗る百合根、チエ、カオル。

百合根「ええ景色やなあ...なんかこうゆう感じ、昔を思い出すなあ」

チエ、カオル「.....」

百合根「カオルが小さい頃、いっぺん母さんと、ワシと、三人で観覧車乗ったことあったやろ...

あのときもこんな感じやったなあ」

チエ、カオル「.....」

百合根「チエちゃん、カオル...ワシ、ちょっと思うんやけど...」

カオルに目配せするチエ。

チエ「カオル君て、いま、付き合ってる人おるん？」

百合根「?!」

カオル「.....」

チエ「もしおるんやったら、これからウチと会うの、止めた方がええやろ」

百合根「...チエちゃんはどうか...カオルとは会いたないか」

チエ「ウ、ウチは...」(汗)

百合根「カオルは？」

カオル「付き合ってる人はいない、でも...」

チエ、百合根「.....」

カオル(チエを見つめながら)「...好きな人はいる」

チエ(目を逸らして)「それやったら...ウチとは、会わんほうがええんとちゃう？」

カオル「...そうかもしれない」

百合根「.....」

チエ「……」

三人の向こうに、観覧車の窓から沈んで行く夕日が見える。

* * *

遊園地を出て、駅まで歩く三人。

駅の前で

百合根「...どうや、三人で晩飯でも」

カオル「今日は早く帰らないと...」

百合根「そうか...ほな、また今度な」

チエ「……」

カオル（チエに向かって）「今日はどうもありがとう」

カオルの顔を見上げることができず、うつむいたままのチエ。

改札を通る三人。

カオルは、チエと百合根とは反対方向になる。

線路を隔てて、ホームで向かい合わせになるカオルとチエ、百合根。

チエと百合根の側の電車がホームに近づいてくる。

百合根（向かい側のホームのカオルに手を振りながら）「体に気ィつけてな！」

頷いて手を振るカオル。

黙ってうつむいているチエ。

* * *

電車がホームに入ってくる。しばらく停車し、ふたたび発車する。

残されたホームに、チエが一人で立っている。

「！」

驚いた表情のカオル。

線路を挟んで、向かい合わせに立つ二人。
チエを見つめるカオル。うつむいたままのチエ。

「あれで、よかったんだよね...」
ホームの向こうからチエに声をかけるカオル。
思わず顔を上げてカオルを見つめるチエ。

カオルの側の電車がホームに近づいてくる。

カオル「さよなら」

二人の間を遮るように電車がホームに入ってくる。

電車が発車した後、ホームに一人立つチエ。

* * *

お好み焼き屋の前に歩いてくるチエ。
二階の窓からテツが声をかける。

「チエー！ おまえ、どこ行っとったんじゃ」
「ワシ、せっかくの日曜やから家帰ったのに、ヨシ江しかおらんかったやないか」
「おまえ、最近ヨシ江とグルになってワシをいじめとるやろ！」
「ひょっとしたらお好み焼き屋もグルとちゃうやろな」

うつむいたまま無言のチエ。

テツ「こらー、返事せえ！」
(屋根に寝転んでいた小鉄が立ちあがる)

チエ (独り言のように) 「...最低や」

テツ「なに？」

チエ「ウチは最低の女や」

テツ「そうか、やっと気ィついたんか...まあ、ワシは心が広いから、反省しとるんやったら許したる」

チエ「.....」

テツ「なにしょぼくれとんねん！ おまえ、まさか男遊び...」

「バコッ！」

屋根の上から近づいてきた小鉄にどつかれてひっくり返るテツ。

（小鉄「大声でなんちゅうことゆうんや...近所にまる聞こえやないか」）

お好み焼き屋の戸がそっと開き、百合根が姿を現す。

百合根「チエちゃん、今日はすまんことしたな...ワシ、気にしてたんや」

チエ「.....」

百合根「カオルに好きな子がおるとは知らんかったから...」

百合根に背中を向け、目を閉じてうなだれるチエ。

「ウチは最低の女や...」

「アホや...カスや...」

下からチエを覗きこむ小鉄とジュニア。

小鉄「どないしたんや...」

ジュニア「...失恋でもしたんか」

百合根（涙ぐみながら）「チエちゃん...」

第十話 宝塚の長い一日の巻

西萩高校。放課後。

校門を出るチエ。

帰り道を歩くチエ。

後ろから呼ぶ声。

「チエちゃん」

「.....」

「チエちゃん！」

肩を叩くヒラメ。

ヒラメ「どないしたん、最近元気ないやん」

チエ「そう？」

ヒラメ「なんか無口になったような気ィする」

チエ「...ウチ、いっつもいらんことばかりゆうてるから、今くらいでちょうどええねん」

ヒラメ「なんかあったん？」

チエ「.....」

ヒラメ「なんかイヤなことあったときは、気分転換せなあかんで」

と言いながらチケットを二枚見せる。

チエ「なにこれ？」

ヒラメ「タカラヅカ一緒に見に行かへん？」

チエ「タカラヅカ？」

ヒラメ「ここだけの話やけど、ウチとこの兄ちゃん、大学でタカラヅカのファンクラブ入ってるねん。それで、今度の公演の余ったチケットくれてん」

チエ「へえ...」（「ヒラメちゃんの兄ちゃんてそうゆう趣味やったんか...」）

ヒラメ「恥かしいから誰にもゆわんといてや。兄ちゃんにも、絶対にゆうなてゆわれてんけど、

チエちゃんやから特別や」

チエ「タカラヅカか...」

ヒラメ「今度の日曜日やねんけど、どう？」

チエ「...せっかくやから、行ってみよかな。ウチ、まだ見たことないし」

ヒラメ「よかった。ウチも、なんか一人で行くのも恥かしいから。チエちゃんと一緒にやったら嬉しいわ」

チエ「宝塚か...」

「宝塚？」

日曜日。

かたぎ屋の店内。

シャキッとした服を着て出かけようとする百合根にテツが声をかける。

テツ「おまえ、年甲斐もなく...あんなデレデレしたもん見にいくてどうゆうつもりや」

百合根「アホ、歌劇を見に行くんやないわい」

テツ「それやったら何しにいくんじゃ」

百合根「おまえの知ったことか...それよりおまえも休日くらい家で家族サービスでもせんかい」

テツ「ワシには休日なんかないんじゃ」

百合根「たしかに...おまえは一年中休日やからな」

テツ「やかましわい！」

店を出て行く百合根。

テツ「行きよった...あかん、ワシも出ていこ。ジュニアが帰ってきたら何されるかわからんからな」

「こんにちは」

入れ替わりに店に入ってくるヨシ江。

「！」

ヨシ江「あんた」

テツ「...なんや、連れ戻しにきたんか」（汗）

ヨシ江「百合根さんは？」

テツ「今出て行きよったわい。宝塚に行くゆうてな」

ヨシ江「宝塚！？」

テツ「なにを驚いとるんや」

ヨシ江「チエ、今日タカラヅカ見に行くゆうてヒラメちゃんと出かけたんですわ」

テツ「なに？　なんか宝塚で面白いことでもあるんか」

ヨシ江「.....」（考え事をする表情）

テツ「ワシも行こ！　たまには気分転換せな、頭おかしなる」

店を飛び出すテツ。

ヨシ江「あんた！」

追いかけるヨシ江。

* * *

電車に乗っているチエとヒラメ。

ヒラメ「楽しみやなあ。ウチ、昨日タカラヅカの雑誌兄ちゃんに貸してもらって読んできてん」
カバンから雑誌を出すヒラメ。完全に盛りあがっている。

「チエちゃんも読む？ あらかじめいろいろ知っといたほうが面白いで」

チエ「……」（考え事に耽っている）

ヒラメ「星組のコトブキレイナゆうのが今日の主演やて。すごい人気あるらしいで」

ヒラメから手渡された雑誌をパラパラと眺めるチエ。相変わらず物思いに沈んだ表情。

「『風と共に去りぬ』で映画もあるんやなあ。チエちゃん、見たことある？」

「…ウチ、ずっと前に見たことあるわ。小学生の頃、お母はんと一緒に」

ヒラメ「そういえば、さっきナンバの駅で小鉄とジュニア見たような気ィするけど、気がつかへんかった？」

チエ「え？」

ヒラメ「…ひょっとしたらタカラヅカまでついて来るつもりやろか」

チエ「まさか」

ヒラメ「せやけど、まえ、空港にも一緒について来たやん」

* * *

阪急電車の屋根に乗っている小鉄とジュニア。

ジュニア「なんやねん、年甲斐もなくタカラヅカなんか見たいて」

小鉄「そうゆうわけやないけど」

ジュニア「そら、オレかてちょっとは見たいけどやな…」

小鉄「おい、ゆうとくけど、ワシはタカラヅカが見たいわけやないど。ただちょっとチエちゃんが気になるから…」

ジュニア「おまえ、人間のことは関わるとちゃうんか」

小鉄「いや、今回は特別や。チエちゃんがこんなに落ちこんでるの見たんは初めてやからな」

ジュニア「…オヤジの息子に振られたからやろ」

小鉄「いや、振られたというより、まだ中途半端な状態のままゆう感じなんや」

ジュニア「どうゆうこっちゃ」

小鉄「まだ気ィつかんのか…宝塚ゆうたらカオルの住んでる所やないか」

ジュニア「！」

* * *

チエたちと一本遅れの電車に乗って宝塚に向かう百合根。

さらにその次の電車に乗っているテツとヨシ江。

テツの無然とした表情。もちろん電車賃はヨシ江持ち。

ヨシ江「二人で電車を出かけるなんて久しぶりですなあ」

テツ「...これ、ほんまに宝塚に向かっているんやろな」

ヨシ江「大丈夫ですわ...でも、向こうでチエたちに会ったら、びっくりしますやろな」

テツ「チエの行く場所は分かってるんやろな」

ヨシ江「まあ、なんとかなりますやろ」

(テツ「このまま帰るまでヨシ江と二人だけゆうのは勘弁してくれよ...」)

* * *

宝塚の駅に到着し、ホームにおりるチエとヒラメ。

チエ(小声でつぶやくように)「このホーム...あのときのまんまや」

ヒラメ「チエちゃん、なんかゆうた？」

チエ「いや、別に...」

階段の上でしばらく立ち尽くすチエ。

ヒラメ「ほな、行こか」

チエとヒラメ、階段を下って行く。

後に続く小鉄とジュニア。

次の電車が到着、ホームにおりてくる百合根。

階段を下って行く。

その次の電車で到着するテツとヨシ江。

ヨシ江「着きましたで」

テツ「...えらい長かったな」

ヨシ江「で、どうします？」

テツ「チエのところに行くに決まってるやんけ」

ヨシ江「ほな、歌劇場ですわ」

テツ「歌劇場で...そんなもん見てもちよっともおもろないやんけ」
ヨシ江「切符がなかったら中に入れませんわ。劇場の外で待ってましょか」
階段を下りていくヨシ江。

テツ「ああ疲れた...なんでワシ、こんなところ来てしもたんやろ」

* * *

宝塚歌劇場。
ミュージカル「風と共に去りぬ」の看板が出ている。

ヒラメ「チエちゃん、入る。中で食べるもん買うて、始まる前に食べよ」
チエ「うん」
なんとなく辺りを見まわしながら入っていくチエ。

ジュニア「楽しみやなあ。オレ、こうゆうのいっぺんも見たことないんや」
小鉄「アホか。ワシらが入れるわけないやろ」
ジュニア「なんでやねん。便所の窓から入ったらええやんけ」
小鉄「...ここは場末の映画館とちゃうど。ワシらは適当に表で待っとこ」
ジュニア「表で、て...せっかくここまで来たのに」
小鉄「もっと大事なことがあるやろ」
ジュニア「？」
小鉄「ひょっとしたらカオルも来てるかもしれへんやないか」
ジュニア「カオルが何しに来るんや。チエちゃんがカオルに会うつもりやったらヒラメちゃんと一緒には来えへんやろ」
小鉄「...なんとなくそんな気がするんや」
ジュニア「おまえ、なんとなくだけでこんなところまで来るのか！」
小鉄「君、長年の人生経験で養われたボクの勘を甘くみちゃダメだよ」
ジュニア「まあええわ。じゃあおまえここで一人で待っとけ。オレ、中に入って見物してくるわ」
小鉄「君はオヤジの息子の重大な問題よりもデレデレした踊りの方が大事なのか」
ジュニア「中でカオルを探すんやないか」
入り口に向かって走り出すジュニア。

小鉄「待ちたまえ！ そうゆうことならワシも...」
ジュニアの後を追って走り出そうとした小鉄、少し離れたところを百合根が歩いているのを発見する。

小鉄「ジュニア！」

しかし、もはやジュニアは入り口を探して遠くまで走り去ってしまっている。

「しゃあない奴やなあ...」

ぼやきながら一人で百合根の後をつける小鉄。

* * *

「Fの31、32と...」

切符を見ながら座席を探すヒラメ。

ヒラメ「あそこや！ よかった、ええ席やわ」

劇場を見まわしているチエ。

チエ（独り言で）「アホやな...こんなところにおるわけないのに」

そのとき、非常灯の上にいる猫を発見。

チエ「ヒラメちゃん、ちょっと...あれ、ジュニアとちゃう？」

ヒラメ「え？ ！ ...ほんまや。やっぱりついてきたんや」

チエ「しかし、ようやるやっちなあ...そんなにタカラヅカが見たいんやろか」

ヒラメ「小鉄はどこおるんやろ」

チエ「警備員に捕まらんかったらええけど...」

* * *

喫茶店でチョコレートパフェを食べるテツ。

その向かいの席でコーヒーを飲むヨシ江。

「あんたも昔と同じモンが好きなんですかあ」

「どうでもええけど、この席、外から丸見えやんけ。あんまりこうゆうところ、チエには...」

「大丈夫ですわ、さっき開演したばかりですから、あと二時間くらいかかりますやろ」

「...ワシら、あと二時間もここでこうやってるんか」

「ほな、このへんを散歩でもしましょか」

「それもパッとせんなあ...もっとガラの悪いところなら...いやその...ワシ、あんまりええカッコしいばかりの場所は得意ちゃうからな.....あれ？」

「あれ、お好み焼き屋のおっさんやんけ」
喫茶店のガラス越しに、百合根が歩いているのを発見するテツ。
「?!」
ヨシ江も百合根の姿を認める。

「ちょうどええわ。おっさんの相手して暇つぶしたろ」
店を出ようとするテツ。
「あんた、ちょっと...」
慌てて勘定を済ませて、テツの後を追いかけるヨシ江。

* * *

ヨシ江「すみません、いきなり呼びとめたりしまして...」
百合根「えらいとこで会いましたなあ」
テツ「ワシ、おっさんのこと応援しに来ったんやど」
百合根「そら有難いなあ。せやけど、今日はワシの応援はいらんで」
テツ「なんでやねん、どうせバクチにでも来たんとちゃうんか」
ヨシ江「あんた...」
百合根「ワシ、これからちょっと音楽会に行きますんや」
ヨシ江「音楽会？」
百合根「ピアノの発表会ですわ」
ヨシ江「そうですか...」
百合根「テツも一緒に聴きに行くか」
テツ「そんなもん聞きたないわい」

後ろでニャーニャー猫の鳴き声。
振り返ると、小鉄が丸太棒を持って立っている。
「なんやー！　なんでこいつがここにおるんやー！」
反射的に逃げ出すテツ。
追いかける小鉄。
啞然とするヨシ江。

百合根「まあよろしいわ...テツは小鉄にまかせて、ヨシ江はん、よかったら、一緒にどうですか」
ヨシ江「.....」
百合根「ワシ、カオルに呼ばれてましてな...大阪で最後の舞台やからゆうて」
ヨシ江「最後？」

百合根「カオル、来週から東京に引っ越すんですわ。本格的にピアノやるんで、東京の先生につくことにしましたんや」

ヨシ江「転校されるんですか？」

百合根「東京の高校に編入するゆうてましたわ…。あいつ、前からそのつもりやったみたいやけど、ワシに気ィつこてたんですわ」

ヨシ江「……」

百合根「ワシ、今日は目立たんように、カオルの弾くところだけ見て帰ろう思てますねん…会場はすぐそこですわ。よかったら一緒に…」

会場に向かって歩き出す二人。

百合根「ほんまはチエちゃんも誘おう思たんですけど…」

ヨシ江「チエを？」

百合根「ワシ、ちょっと余計なことしてしもて、二人に気まずい思いさせてしもたから、声かけられへんかったんですわ…そのへんのことば聞いてますやろ」

ヨシ江「…詳しくは知りませんけど」

百合根「いつまでたってもアホなんですわ、ワシちゅう男は…いらんことばかりして、愛情が空回りしますんや」

* * *

歌劇場を出てくるチエとヒラメ。

ヒラメ（すっかり感激した様子で）「来てよかった！　ウチ、なんかタカラヅカにはまってしまいそう。…チエちゃんは？」

チエ「なんか凄い劇やったわ…あんな歌いながら踊りまわって疲れへんのやろか」

ヒラメ「最後のセリフ、すごいよかったやん。♪『明日は明日の…』」

チエ（ヒラメが歌い出しそうになったので慌てて）「そうそう！　分かる分かる！　『明日は明日の太陽がピカピカ』てやつ」

ヒラメ「そんなんやったかな…」

チエ「ウチ、映画でも見たから覚えてるねん」

そのとき、ロビーの出口から声がきこえた。

「チエー！　ヒラメー！」

チエ「テツ！」

ヒラメ「オツちゃん！」

テツ「チエ、はよ一緒に帰ろ。ワシ、こんなところおってもちよっとも面白くないわ」

チエ「なんでこんなところにおるのん」

テツ「ワシもよう分からんわい。お好み焼き屋のおっさんとチエとヒラメが宝塚に行くからゆうて、ヨシ江が追いかけて来て...チョコレートパフェ食てたらおっさんがおって、そしたら小鉄が...」

ヒラメ「? ?」

チエ「なんのこっちゃ」

ヒラメ「小鉄もおるん？」

テツ「...そうや！ ワシ、さっきまで小鉄に追いかけてたんや。あいつがおらんようになったから、ワシここに来たんやないか」

チエ「なに訳の分からんことゆうてるねん...しっかりしてや。ボケるにはまだ早いで」

テツ「失礼なことゆうな！ ボケとるんはヨシ江の方やんけ。ワシが追いかけてるのにおっさんと一緒にピアノなんか聞きに行きやがって」

チエ「ピアノ？ お母はんもオッチャンもここに来てるんか？」

チエの表情が真剣になる。

* * *

観劇の感激が覚めやらぬジュニア、会場を出たところで道路の向こう側から走ってくる小鉄に出くわす。

ジュニア「おーい、小鉄！」

小鉄「ジュニア！ おまえ、なにしとったんや」

ジュニア「中々よかったで...でもオレの好みからいくと、もうちょっと乱闘シーンがあってもよかったな」

小鉄（目に線）「...おまえ、すっかり観光客になっとるやないか」

ジュニア「カオル探したけど、おらんかったみたいやで」

小鉄「アホ！ カオルがおるのはあっちや」

ジュニア「？」

小鉄「説明してるヒマなんかないわ、アホ！ はよチエちゃん連れて行かな、間に合わんのや」

ジュニア「そんなアホアホゆわんといってくれ...まだ舞台の余韻が冷めてないんやから」

ロビーに駆け込み、チエ、テツ、ヒラメの三人の姿を見つける小鉄。

「やっとカオルのおる所が分かったんや！ チエちゃん、早くこっち！」

「小鉄！」

ニャーニャー叫ぶ小鉄の後を反射的に追いかけるチエ。

ヒラメ「チエちゃん...」

チエ「ヒラメちゃん、ごめん！　ウチ、ちょっと行くところあるから！」

小鉄の後をついて走るチエ、ジュニア。

残されたテツとヒラメ。

ヒラメ「...オツちゃん、どうする？」

テツ「ワシ、はよ帰りたいけど...その前に腹減ったな」

ヒラメ「たこ焼きでも買って食べよか...」

テツ「ヒラメ、ええところあるやんけ。そうゆうのは誘ったモンがおごるのよ」

二人で駅に向かって歩き始める。

* * *

宝塚のコンサート・ホール。

ロビーには「本日の発表会は終了いたしました...」というアナウンスが流れ、建物の出口から帰途に着く聴衆が続々と押し出されている。

建物の外に立ち尽くすチエ、小鉄、ジュニア。

小鉄「間に合わなかったか...」

ジュニア「この中にカオルがおるんか」

小鉄「そのうちおまえとこのオヤジとヨシ江はんも出てくるやろ」

人の流れに逆流するように、人波を掻き分けながら会場の中に入っていくチエ。百合根とヨシ江が会場から出てくるが、チエとはすれ違いになる。

* * *

チエがやっとの思いで中に入った頃には、受付の後片付けも終わり、ロビーは閑散としていた。

ホールの扉を押し開けて、観客席の中に入るチエ。

誰もいない観客席。

照明の落ちた暗いステージの上で、ピアノに向かっている男の影。

* * *

ステージにゆっくりと歩み寄るチエ。

チエの方を見つめるカオル。

観客席の一番前、ステージのピアノの真下に立つチエ。

カオル「さっき父さんとチエちゃんのお母さんに会ったよ」

チエ「...ウチのこと、待ってくれてたん？」

カオル「来てくれるような気がしたから」

チエ「ウチ、こないだのこと...」

カオル「気にしないで。それより、チエちゃんに聴いてほしかったんだ」

チエ「？」

カオル「もう、しばらく会えないかもしれないから」

* * *

カオル「どんな曲がいい？」

チエ「なんでもええよ...ウチ、あんまり知らんから」

カオル（微笑みながら）「...困ったな」

チエ「じゃあ...『風と共に去りぬ』って知ってる？」

カオル「うん」

チエ「...あの、最後の曲」

カオル「『タラのテーマ』だね」

ゆっくりと弾き始めるカオル。

* * *

観客席の最後部で、黙ってピアノの音色に耳を傾ける小鉄とジュニアの背中。

その向こうに浮かぶ、ステージでピアノを弾くカオルの姿と、席に座っているチエの後姿。

* * *

宝塚の街の夜景。

ネオンライトに照らし出されるミュージカル『風と共に去りぬ』の看板。

歌劇場の前で向かい合わせに立つチエとカオル。

チエ「ほんなら...ウチ、帰るわ」

カオル「いろいろありがとう...これからも父さんをよろしくお願いします」

チエ「お世話になってるのはこっちの方やから」

カオル「それじゃ...」

カオルに向かって手を差し出すチエ。

カオル「？」

チエ「握手。...記念に」

困惑しながらも、差し出された手を握り返すカオル。

チエ（カオルの手を握りながら）「柔らかい手やね...ピアノ弾いてるとこうなるんかな」

カオル「.....」

手を放すチエとカオル。

チエ「また、聴かしてな。それまでに、ウチ、いろんな曲覚えとくから」

カオル「うん」

チエ「...さいなら！」

カオルに背を向けて、走り出すチエ。

少し行ったところで、立ち止まってカオルの方を振りかえる。

まだ立ち尽くしているカオルに向かって、にっこり微笑みながら右手を上げて敬礼のポーズを取るチエ。

カオルも微笑みながら同じポーズを取る。

再び背を向けて走って行くチエ。

カオルも歩き始める。

* * *

二人の様子を少し離れたところから眺めていたジュニアと小鉄。

小鉄「ジュニア...ワシらも行くか」

カオルの後姿を見つめるジュニア。

小鉄「.....」

カオルを追いかけて走っていくジュニア。

ジュニアの鳴き声に振り向くカオル。

マフラーをちぎって、カオルに差し出すジュニア。

ジュニアの差し出したマフラーの切れ端を受け取るカオル。

ジュニア（小鉄のところに歩いてきて）「ほな、行こか」

「……」

歩いていくジュニアの背中を見つめる小鉄。

* * *

阪急電車の中。四人掛けの椅子に座る百合根、ヨシ江、ヒラメ、テツ。

ヒラメ「チエちゃん、とうとう来えへんかったなあ...どこ行ったんやろ」

ヨシ江「そのうち、一人で帰ってきますやろ」

百合根「ジュニアも一緒やったんか...」

テツ（窓の外を見ながら独り言で）「退屈で長い一日や...」

百合根（独り言で）「カオル...」

別の車両の座席に腰掛けているチエ。

その電車の屋根に寝そべる小鉄とジュニア。

夜の街を走る電車の空撮。

第十話終わり

チエの青春 短編集

<http://p.booklog.jp/book/90520>

著者 : yoyogiz

著者プロフィール : <http://p.booklog.jp/users/yoyogiz/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/90520>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/90520>

電子書籍プラットフォーム : ブクログのパー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社 : 株式会社ブクログ